

## 胡風研究ノート (一)

—その理論形成期についての伝記的考察—

近藤龍哉

はじめに

胡風と胡風が養成した若手の作家や詩人たちは、解放後の中国文学界にあつて、幾度かの批判をうけ、孤立しはじめていたとはいえ、その影響力は無視しえないものであった。批判者との論争の中で体系化されたその「理論」は、一九五五年の「文芸報」の一・二期の付録として公開された「文芸問題に関する意見書」をもつて代表させることができるが、公開されたその時は既に批判の対象とされていた。

胡風の文芸思想は、文芸分野でのブルジョア思想ときめつけられ、全国文連主席団拡大会議はこれとの闘争を決議した。胡風批判の大キャンペーンが展開され、圧倒的多数の作家たちの批判の文章が発表される中で、胡風は、何度も手直しした末「私の自己批判」を書くが、それは彼の反党活動を裏づけるとされた「胡風反党集団に関する若干の

材料」の付録として公開されるという皮肉な扱いを受けた。その「材料」とは、かつての胡風グループの一人舒蕪によって、胡風の私信に注と解説をつけられ反党活動の証拠とされたもので、一方的で打撃的なものであった。続いて、第二、第三の「材料」が公表されるが、いづれも私信とその解説であり、批判の対象は胡風から胡風のグループへ、罪は反党から反革命へと拡大されていった。胡風は文芸界から追放されたのみならず、更に反革命陰謀集団の首領として逮捕され、その政治的生命は完全に失なわれてしまい、他のメンバーに対する大がかりな摘発も行なわれ、ここに一九三〇年代後半から中国の文芸界に一定の影響を与えて来た一つの文学的グループが一掃されたわけである。

胡風の名は、その後中国で批判運動がおこる度ごとに反革命二面派の典型として引きあいに出され、文化大革命や四人組批判のような政治的大変動の中でもその評価は不変である。

こうした中国の事情とは別に、日本では胡風理論、とりわけ「意見書」を読んで、「これほど情熱的に論述することが、職業的スパイにはたして可能か」という疑問の声をあげる人が無いでもない。ただ「反革命」でないという証拠を海のこちらで捜すことは不可能に近くこの問題を正面から論じる人は少ない。

竹内実氏は夙に中国の「批判闘争」のあり方に疑問を提示し、胡風批判に関しては、「意見書」の翻訳の解題（『現代中国文学』散文評論篇・河出書房新社）で「社会主義文芸の主導となろうとした点で、胡風もまた、彼が批判する相手と共通の基盤にたっていた」としてその主観的意図に関して批判者のいう「反革命」という規定に根本的な疑義を表明している。この点に関しては、私も全く同感であり、胡風の経歴を調べ、その著作を読むかぎり、胡風は彼なりに中国の社会主義的近代への一つの選抜肢を提示しているのだと私は考えている。

しかし、一方「胡風、胡風派の文芸理論が決定的に否定されたことは、(略)中国における〈近代〉の限界ばかり、

でなく、〈革命〉の限界——〈革命〉が〈近代〉に対して寛容である限界——を示している側面もあるはず」とする氏の言葉に論点として大きく啓発されるものを感じながらなお釈然としないものが残る。

胡風の「理論」が政治的に葬り去られたことにみられる中国社会の持つ限界は同様に感じながら、それをもって、氏のいう〈近代の終焉〉と結びつけがたいものを感じる。それは、中国革命の課題の複雑さは、西洋的近代をもって解決されうるようなものではなく、中国は社会主義社会の中で中国独自の近代を目指していると思えるからである。さらに胡風をもって〈近代〉を代表させることは、胡風の理論をブルジョア文学理論として退け、同じ現実基盤に立って提出された一つの選択肢として冷静に検討せず、政治的決着をつけてしまった批判者の態度の裏返しになってしまうのではないだろうか。

胡風の提起した理論が、本来あるべき文学論争として中国社会に貢献できなかったのには、それなりの阻害要因が存在したはずであり、(その中には当然胡風の側の問題点も含まれる) そのことの追究なく、二者択一的な論断はどこまでも平行線をたどることになる。

以上の問題を論じつくす準備は現在ではまだないが、その第一歩として、本稿は胡風の理論形成に大きな役割を果たしたと思われる青年時代、とりわけ日本時代の文学活動をさぐり、胡風理論解明の手がかりすると同時に、今まで一方的に断罪されたままになっている経歴に新たな光を与えてみたい。

〔一〕

.....

武蔵野の空は、今も高くそして青いだらう。

僕らの日々は、僕の心の中にいきている、

あれらの日々の物語は、僕の心の中にいきている。

あの高くそして青い大空の下には、

灰色の大きな建物があり、

そのセメントの高い壁の中に、

僕らの兄弟たちが大勢つながれている。

麦飯を嚼み、

頬骨をヒクヒク動かしている、

青白い君の顔が、

遠くなったり近くなったり

僕の心の中にゆれている……。

一九三六年八月改作の日付を持つこの詩は、「武蔵野之歌」という題で一九三七年一月初版の胡風の詩集「野花与箭」に収められている。その「題記」で胡風はこの詩と、もう一首、一九三二年一〇月に東京で書いた「仇敵底祭祀」《北斗》二巻一期）に対して、「力足らずといえども、氣持ちは、矢が敵に向かうが如く、はっきりとした方向を持っているといえるだろう」とのべている。武蔵野の空の下で過した獄中生活を懐しむ作者の氣持ちは、単なる感傷ではなく、階級闘争を命を賭して闘った者の持つ、充実した日々への満足感と、ともに闘った同志に対する国際的な連帯感がそこにこめられているからである。胡風にとつての日本とは、彼の人生の方向を革命的实践に向かつて確定させ後に述べるように「革命」と「文学」を統一して考える契機となつた貴重な体験の場なのである。

「東京神田区のひっそりとした通りに、江戸ビルと呼ばれる建物があつた。ビルとはいっても各階四、五部屋の、古くなつた三階建ての洋館にすぎなかつた。その三階に、ある民間の研究所が事務所を借りていた。友人の日比君がはじめて僕をつれてその「芸術学研究会」に参加したのは、二年後のことであつた。

部屋の中には、長い古いテーブルがあつて、囲りのこわれた椅子やビールの箱には、どれも人が腰かけていた。情熱的なやら、静かなのやら、だがどれも皆真面目な顔をしていた。彼らは声をこらして、発言し、討論し、口論をしたが、彼らの主張は、日本の文芸界と大衆の中で、大きくはつきりと響きわたつていた。あの煙草の煙のたちこめた息のつまる空気の中で、僕は、自分の敗れ去つた理想主義というものがどんなものであつたかを理解し、七、八年間もつれてきた社会観と芸術観の矛盾が解けた。

ここまで書いて来て、海に向かうこの友人達を思い出した。彼らは、大日本帝国の民草ではあるけれど、×

×が全中国を征服しようとしている皇威の下で、一層苦しい日々を過すことをよぎなくされている。僕の眼前には、彼らの顔が、一人一人現われてくる。僕は彼らが懐しい。(理想主義時代底回憶)一九三四年五月)

胡風がはじめて、その筆名「胡風」で書いたこの文章は、雑誌「文学」の一週年記念特集「我与文学」に収められている。彼は、その文章の最後を、このように締めくくったのである。少くとも一九三四年五月の時点で、彼の日本時代の経験は、そのまま彼の文学的立場へと連っている。そして、ここで述べられている「社会観と芸術観の矛盾の解消」即ち、革命的实践と文学活動が統一的に把握されるのだという自覚は、後にのべるように日本のプロレタリア文学運動の理論であり、それは彼にとってはマルクス主義の文学理論として普遍性をもったものとして受け入れられたのである。その後の胡風の文学理論の展開は少くとも胡風の主観的意図に即して言えばマルクス主義文学理論の追求という形で行なわれることになる。

ここで彼が、決定的影響を受けたと自覚する「芸術学研究会」とは後にのべるようにプロレタリア科学研究所の一分科会であり、そして彼の第一評論集である「文芸筆談」(一九三六年四月)の「序」(一九三六年三月)によれば、それは一九三一年のことであった。胡風、二十八歳(数え)のことである。

「一九三二年、私に啓蒙的芸術理論教育を与えてくれた何人かの友人にあらうまで、私と文学の交渉は、ほとんど自己の欲求を満足させ、文芸世界の中には自己を発見し、自己を高めることのみ限られていた。その現われの一端は、私が『文芸批評』を非常に軽視していたことである。他人の心血の結晶のうえで、手まね足まねしてあ

だ、こうだ、いいわるいというのは、まったくろくでもないことだと思っていた。」〔文芸筆談「序」〕

以上簡単にみてきたとおり、一九三一年の日本における友人との邂逅は、文学観上の一転換を持たらし、またその後の日本における活動の貴重な経験が、その後の彼の生き方を大きく方向付けたといふことができる。とすれば我々は、胡風の日本時代の活動の内容を出来るだけ明らかにしなければならぬし、そのことによつてあるいは胡風の文芸理論の形成過程の特徴をさぐることもできるだろう。

だが、その作業に入る前に、暫くは彼の生いたちと、彼が日本に来るまでの経過を見ておくことにしたい。

## 〔一〕

### (1)

胡風<sup>(1)</sup>は本名を張光人<sup>(2)</sup>といい、一九〇四年十月三日湖北省東部の蕪春県善堤壩地区の農家に張濟<sup>(3)</sup>の三男として生まれた。胡風という筆名は一九三四年に使いはじめた。彼は又の名を張光瑩とも言うらしい。又、胡風を名のる前の時期（一九三一—三四）は主に谷非、又は張谷非を名のつた。魯迅は、その日記に、光仁、古斐、古飛、張因なども記しているが、実際にこれらが使われたというより、やはり同音の文字を当てたに過ぎないと思われる。又張古因とも称したという説もある<sup>(4)</sup>。谷非・胡風以外では、谷風・秋明・孟林・馬荒などの筆名が現在わかっている<sup>(5)</sup>。彼の出身がどんなものであったかについて自伝（C）の中で彼は次のように語っている。

「一九〇四年の冬、私は湖北省東部のある湖畔の寒村でうまれた。もとは裕福な「旧家」であったそうだ。しかし若死にした祖父の一代前には没落してしまっていた。みなしごであった父親が、母——貧しい農民の娘——と結婚した時、その日にもうとなりの家に米を借りにいかなければならなかった。それから二人は長年の間、豆腐作りの労働をした。しかし私がものごころついた頃には、二人の兄が成人し、暮らし向きはすこしずつよくなつていった。」

胡風批判の時、胡風の出身地である湖北日報の記者は、蕪春県に行つて調査をした。その結果は(四)に収められているが、次の通りである。

彼の家庭は反革命的地主の家庭であり、湖北省蕪春県第二区邵壠郷と下石潭郷に住んでいる。(解放前の地名は菩提壠区大經橋郷である) 胡風の兄弟四房で併せて一五〇畝余であり、その中の三〇余畝は、長工を僱つて耕作し、一二五畝は小作に貸し一年の地代は穀二五〇余石を課した。

だがこれは、兄、張名山が殺される一九四七年以前、最も張家が隆盛を誇つた頃のことであろう。この調査は、いかに張兄弟が「農民に敵対する立場に立っていたか」を明らかにするものであるが、少くとも幼年期の情況ではない。この地方は、揚子江の流域で、湖が多く、したがつて耕地は少いので、漁業が盛んである。同時に、窰を作つて陶



器を焼いて生業とする者が多い。又、そうした審民に対して、一方で陶器を買い入れて一方で食料を売る商業が発達していた。張の一族では豪紳地主の張伯楷というのがこれらの産業で巾をきかしていた。(この地方は方姓及び張姓の一族が二大勢力をなしていた)

長兄、張名山は、審民相手に油麵、豆腐、酒を作って売る小商人であったが、張伯楷に替って借金の取り立てをやするなどして次第に高利貸的存在になっていき、遂には、張伯楷に取ってかわる程の勢力を持ったという。(E)だがそれはずっと後のことで彼が自伝の中で「揚子江中部旁の一農家の息子として生れる」(A)と書いたり「人手が足りないので、幼年時代、私は牛の放牧や稲の見張り番というような仕事をやった」(C)と書いてもあながち経歴詐称とは言えない。ただこの自伝を書いた時点では、自らを被圧階級に少しでも近づけたいとする意識が大きく存在したこと、それが自己の経験の中から、少しでも農民や労働者と共通するものを捜し出し位置づけようとする方向に傾いたことは、十分に推量できる。

「父は剛直な性格で非常に厳しく家を治めた。母親は心のやさしい感じやすい女性で、貧しい近隣や親戚に対して、いつもこっそりと援助をしてやった。長年の苦しい労働と栄養不良とで貧血病をわずらい、しょっちゅう、不意に意識不明の状態に陥るのであった。」(C)

このように或意味では、ごくありふれた両親——厳しい父とやさしい母——に加えて、胡風に大きな影響を与えたのが前述の兄たちである。長兄は張名山、次兄は張名梯といいそれぞれ胡風よりも、十七歳と十二歳も年長である。<sup>(6)</sup>

胡風の言葉をかりれば前者は「腕のたつ製麵職人」であり、後者は、「まじめな小作農」で、この二人が働き手に加わることによって張家の暮し向きは良くなつていった。胡風はとりわけ長兄を尊敬し、愛していたようである。一九二七年七月、革命の挫折に憔悴し、各地を流転（逃亡生活）する中で思いを長兄に寄せて「獻給大哥」という詩を作っている。又、一九四七年、長兄が殺害された年に出版された第六批評論文集「逆流的日子」（上海、希望社、一九四七年三月）の見開きには、黒ワクで囲まれた「紀念 私の長兄 張名山——愛と労働、自己犠牲と人にしたわれる善良行為の徳性を用いて、私を育て私を教育した第一の人。深い愛と理解と信任を私に与え、私が自分の信ずるところによつて生活して来るのに力を持たせてくれた人。」という献辞をささげていることからそれは知れる。病弱の母が一九一七年に死んだ後、母の愛情に替わるものとして自分よりずっと年上で自分の庇護者であつた長兄への敬愛が深まつたとしても不思議なことではない。先に揚げた「獻給大哥」の詩の一節に「あなたの体の汗の香と土のにおいはやさしき母のおだやかさを運んできた」とあるのもそうした感情であろう。この兄への愛情の表現は、後に張名山の地主としての悪徳が暴露されると同時に、胡風が「もともと地主階級の立場に立つて、農民の解放に反対した」との証拠ともされることになつたのである。

「私の性格がのろまなのを見てとつたので、父親の計画は、私に二、三年勉強させた後、町の商店に送つて丁稚にすることだつた。というのは、彼からすれば、これは、必ずしも激しい労働の苦しみを受けずに、生計をたてることのできる最も都合のよい道だからだ。だが、私が村学で一、二年学ぶ内に、意外にも、教師と同族の何人かの長老の称賛を得ることになり、これまで、紳士たちの脅威を受けていた父や兄は、私を「読書人」にさせる

ことに決めてしまった。」(C)

こうして胡風はお定りの晦渋難解な古書を数年間学ぶことになった。一家の胡風への期待はおそらく大きなものであったろうし、兄たちが甘んじて経済的な負担を担ったのも一家の期待の現われであろう。確かにこうみても胡風の知識人としての人生の出発は張家の経済的上昇と強く結びつくことによって可能となったのだが、しかし彼がそのレールの上を歩んだのはほんのわずかの期間に過ぎなかった。

(2)

胡風は何年か村学で学んだ後、「たまたまある相棒と相談したことが原因で」(C)県城の新式の公立小学の試験をうけて入学した。一年すると「満足できずに」武昌のある中学に補欠生として入った。五四運動の二年後というから一九二一年のことである。(B)

張家のある蕪春県は、武昌から揚子江を下るところ約一五〇キロ、江の東北岸にあり、江にそそぐ蕪水の河口近くに県城、蕪州がある、下流に七五キロも下れば九江である。十五・六の少年張光人は、初めて身を「数百里の外」に置いたのである。だが彼にとってそれはそんなに重大な決意のあるものではなかったらしい。

「なぜあくまでも家庭に反抗し、飛び出して中学を受けようとしたのか、今ではもう詳しく思い出すことは出来ない。しかし、当時、『法政専門』を唯一の志望にしていた一般の地主のおぼっちゃんたちに強烈な反感を持

ち、専ら『左伝』『古文辭類纂』ばかりを教える小学校にもじつとして居れず、ただぼんやりと、もつと明るい場所がきつとあるはずだと考えたので飛びだしたに過ぎなかった。」(B)

地主の子弟たちへの反撥と、現実の学校への不満がバネとなり、未知の世界への興味と希望が彼を武昌へと引っぱりだしたわけだが、その背景には五四運動によってかもしだされた何かしら新しい雰囲気が後の周りにもとどいていたことがあつたのだろう。

以後、終始家族を愛しつづけた胡風が、ここで「家庭」に反抗したと書いているのは、恐らく父親の反対に対してであろう。「湖北日報」の記者が伝える次の話は、この時のことではないかと思う。

「胡風の父親張濟発は、胡風が家を出て学問し、「事業をする」ことに反対で、彼に家において「家業を守る」ことを求めた。だが張名山は懸命に胡風が家を出て学問することを主張した。彼は胡風を励ましていった「谷児（胡風の幼名）、俺のいうことをきけばまちがいない。外に出て学問しろ、俺たちのような家は、ただ金だけがあつたつて勢力がなければだめだ」(B)

果してこの挿話が、だれの記憶に基づくものか、真実を伝えているか確認する術はない。長兄という理由は学問に勢力を得ることであり、胡風の武漢への脱出もこうした兄の賛同と援助がなければ実現しなかつたであろう。「湖北日報」の記者によれば、その後の胡風の学費は、長兄張名山によって作られたという。これらのことから長兄の存在

が胡風の勉強に大きな意味を持ったことは確かであるが、その後の推移は必ずしも長兄の希望のようにはいかなかった。

中学は胡風にとってなじみにくいものであった。まず授業は、古文の教科書が平装の選本になったかわりに、わずらわしい課目がふえたにすぎなかったし、「一日中、小政客になった先輩たちと外で交際し、お湯を飲みながら英語の会話を勉強するといった学友たちとは、どのみち一緒にはなれなかった。(B)」。彼は、教科書を読むか、同族のS君と話す他は、一人ぼっちの時をすごした。

彼は後に「僕は田舎からやって来た」という詩を作っているが(一九二五年)この詩の中には、田舎から目くるめく都市にやってきたものの一種の気おくれと、都市の喧噪と強烈な印象に翻弄されたことが表現されている。彼の中には、いつまでも都市の生活にとけこめないものがあつたのも確かなようだ。だがそうした孤独は、彼に「腹のすいた小牛が青草の野原を歩く」ように(B)雑誌や新しい書物を吸収させたのである。彼は文学革命以後、大量に登場した新文化に殆んど手当り次第に、触れて行った。「熱狂的に、まるで奇跡を発見したかのようにそれらを受けとめた。」(B)そしてそれは「様々な異った、甚しくは互いに矛盾するものが、私の頭の中で跳ね舞う」(C)といったありさまであつた。

彼は、胡適の「賞試集」も読んだし郭沫若の「女神之再生」も読んだ。共産党の「嚮導」(一九二一・九)も読めば、胡適らの「努力週報」も読んだ。そんな中で、彼をして本当に文学に近づけ、人生に近づかせたものは、「湖畔詩集」と、王統照の長編小説「一葉」であつたという。(B)

「湖畔詩集」の素直でロマンチックな詩は、新しい生活にあこがれながらも現実の学校生活に失望し、本来青春を分

ち合うべき友人たちが、立身出世を望み功利主義的な生活をしているのに、うちとけられず、孤高を保とうとする胡風にとってふさわしいものであった。それは「私に五四運動によって『自我』を呼び醒まされた青年の感覚を教えてください、周囲の生活によってがんにがらめにされた私の心を救ってくれ」(B)、これはいわば五四の迫体験であり、青春のはじまりであったといえよう。一方「一葉」は、「その吐きだす幻滅の後のため息は、丁度私が生活の中で追い求めていた何かの意識を呼びさまし、私に長い間、名づけようのない憂い、を感じさせた」(B)のであった。それは、やや言いすぎになるのを恐れずにいえば、五四の感激を充分味わないうちに（或は全く同時に）五四退潮期の雰囲気に追いついたということである。五四退潮期にあって「遅れてきた青年」が挫折の気分の中に、五四の残り香を臭ぐことができたとしても彼はやはり五四以後の世代である。

以後、胡風は文芸作品の中に沈酔することになる。彼は「晨报」の「副鵞」を読み、そこにしょっちゅう登場するエロシエンコと冰心女士に心を引かれる。特に冰心の「愛の哲学」には影響を受け、同族の友人S君と、「春水」式の詩をつくりはじめ<sup>(9)</sup>る。その意欲はすさまじく一年にならないうちに部厚い二冊のノートを一冊にしてしまった程であったという。

一九二三年三月、胡風は上海の「民国日報」の副刊「覚悟」に小説を投稿する。この小説は、一九二三年の三月二十九日と三〇日にかけて掲載され胡風<sup>(10)</sup>の文学生活の第一歩となった。題は「兩個分工会的代表」といい「二七事件後、未熟な文章で」「犠牲者にささげるつもり」で書いたものであった。

ここで、二七事件前後の武漢の状況を簡単に見ておこう。

一九二二年一月には、北京と武漢を結ぶ鉄道京漢線の長辛店に労働補習学校が開かれ、一九二二年八月には、長辛

店の三千労働者が二日間のストライキを行う。一九二三年の二月一日には、河南省の鄭州で京漢鐵道總工会の成立大会を招集したが、当時、河北、河南、湖北省等を基盤としていた直系軍閥の吳佩孚は、労働運動の前進に畏れを感じて大会を禁止した。大会代表と來賓二〇〇人は、突破して入り、總工会の成立を宣言したが、会場はふたたび軍隊に包圍された。總工会は秘密會議を行い、二月四日に京漢線全線でストライキを決行することを決め、四日決行された。軍隊は各所で就業を強制したが、ストは続行され、武漢では各工会から代表が集り、江岸で一万余の盛大な慰問大会が開かれ、昂揚した人々は江岸から租界へデモ行進を行なった。漢口の英國領事らと會議を持った吳佩孚の軍隊は、翌二月七日、調停すると称して二個大隊の軍隊をもって組合本部を襲撃した。この襲撃で赤手空拳の労働者糾察隊は、死者三十数名、負傷者二百名余を出した。つづいて軍隊は、労働街を捜査して数十名を逮捕し、江岸分会委員長で共產黨員の林祥謙を逮捕し、就労命令を出せと迫ったが、林は不屈に拒み「首をきられても仕事につかない」とのべて壮烈な犠牲となった。同日は、長辛店でも多数の死傷者を出したが、この惨劇は全国の労働者を憤激させた。又、武漢労働団体聯合会の法律顧問で共產黨員の施洋も逮捕され、一五日に武昌で犠牲となった。武漢では、漢陽製鐵工場、漢口の揚子機械工場などが同情ストに入り、全国に波及して行った。<sup>(11)</sup>

このような情況の中で、胡風は、この事件の犠牲者にささげらるべく、三月の上旬には、小説を書いていた訳である。その題は、「二人の組合分会の代表」である。題材はおそらくこの二七事件に取材されたものであろうが、果してどのような内容かは今のところ確かめられない。<sup>(12)</sup>だが、「悲觀的なメランコリックの心情の中に沈ん」で、「春水」式の詩を書いていた胡風が、おそらくは、武漢全体を震撼させたであろうこの事件を、すぐさま題材として取りあげ、はじめての小説を書いたということは、かりにこの小説の内容がそれほど「革命的」なものではなかったとしても、のち

に彼が日本時代にプロレタリア文学運動に持近していったことを考えれば、彼のマルクス主義的文学活動の前史的な第一歩を示すものとして注目して良い。だが彼のこの一歩はこれに止まり、小説を書くということも我々の知るかぎりこれだけであった。

「だが、私は私の身の周りの現実を忘れることができなかった。読書の広がり、五四運動後の当地の互助社と「武漢評論」が私に与えた影響によって、私も当時の青年たちが有していた憤激を有した。」(B)

この文章からもわかるとおり、彼が文学の世界に沈潜する一方身の周りの現実をも無視しえない青年に育ったのは、当時の武漢の新文化運動が、着々とその歩を進めていたことに負うところが多い。

ここで少し歴史を遡ってみよう。五四の波は当然武漢にも押しよせていた。ここ武漢の運動は、のちに中国共産党の指導者となる惲代英の指導の下で展開された。彼は、一八九五年武昌で生まれ、武昌中華大学の文学系を卒業した後、武昌の中学の教師をしていた。

五四運動が始まるとすぐ、惲代英は武昌に利群書社を開き、進歩的出版物を売り、社会活動を始める。彼は魏以新、林育南(林彪の兄)、廖煥星、黄負生、李書渠(李伯釗)と「互助社」を組織する。又、武漢の学生を組織してデモを行ない、武漢三鎮の罷市を行なった。武漢の学聯宣伝部は「学生周刊」を白話文で十数期出しているがそれには惲代英、黄負生がいつも原稿を書いた。又一九一九年上海で「星期評論」が出ると間もなく、武漢でも、惲代英、黄負生、劉子通、李書渠らが、「武漢星期評論」を出す。これは二、三年続き、一九二三年ごろ終刊した。後半は、武漢の党



グループが指導したという。主な執筆者は先のメンバーの他に李漢俊、そして一九二一年以後は董必武、陳潭秋、錢亦石、夏之栩などが加わっている。その内容は、学生運動、労働運動、女性解放運動（結婚問題）、反キリスト教運動をとりあげたもの、又マルクス主義をいかに学ぶかという文章、一九二二年の武漢の最初のメーデーの記念の文章、そして改良主義に反対する文章などがあつた。又中華大学の校長陳時が梁啓超を武漢に招いて講演させた時は「歡迎梁啓超」專号を出して梁批判を行ない、当時の知識分子に大きな影響を与えたという。胡風のいう「武漢評論」とはこのようなものであつた。先に「互助社」を立てて、青年の共同進歩を助け合うことを始めた惲代英は、「新青年」の委託を受けてカウツキーの「階級闘争」を訳し、又北京に行つて李大釗に会い、思想上の轉換をし、武漢に帰ると、一九二一年の青年組織の聯合大会を開き「共存社」を組織することを決定する。そしてその社章には、プロレタリア独裁、ボルシェヴィキとソヴィエトロシアを擁護することが明記され、やがて中国共産党が成立するや、惲代英はじめ多くの青年たちが、共産党或は中国社会主义青年団に加入したという。

この「互助社」「共存社」は、前後して「互助」「我們的話」などの内部刊行物を持ち、これには「互助社」と関係のある青年の小グループの活動の報道や同志間の通信が載つた。当時湖北省の黄岡（蕪春と武漢の間あたり）の小学校で学んでいた林彪が兄林育南宛に出した通信も発表されているという。「我們的話」も数期出されたが主要な執筆者はやはり惲代英であつたという。

武漢にはこの他に、中華大学学生が「新声」「向上」「社会新声」などという雑誌を編集し、外国語専門学校の学生は「端風」などの雑誌を出していたが、これらも皆ある程度、「互助社」と関係を持っていた。<sup>13)</sup>

以上見て来たとおり、五四以来の武漢の青年運動の主流であつた「互助社」や「武漢評論」は、その指導者の思想

変化とともにマルクス主義に接近する。その影響を受けた多くの青年たちが共産党、社会主義青年団に吸収されて行ったのは、一九二一年から一九二二年頃であり、それは丁度胡風が武漢に出たころのことであるが、胡風はこれらの動きの中に必ずしも参加したとはいえず、むしろ遠くからその影響を受けたのみであった。彼は確かに「二七事件」に憤激し、小説を書きはしたが、そこから直ちに労働運動に参加しなかったことは銘記しておいてよい。ところで武漢の運動も、一九二三年頃には雑誌の停刊や、指導者惲代英が上海に去ったことなど多少とも表面的には退潮現象をみせはじめ、胡風も又武漢を後に「学芸の聖地」と目されていた南京へと赴く。胡風の小説が「民国日報」に発表された一九二三年三月末には、彼はすでに南京にいたという。(B)

「というのは、私はそれを投函するとすぐ再び家庭の意志に反して、もう私の眼には灰色にし見えなくなつた武昌を離れ、当時南方の青年から学芸の聖地とみなされていたN城へと逃げだしたからである。」(B)

(3)

彼は单身南京にやってくると、そこのある大学の附属中学に入る。「当時その新精神を以て全国に名を馳せていた」(C)とあるが、その大学名はわからない。一説に、東南大学附属中学という説がある。<sup>(14)</sup>

彼はここで、大学の友人W君や、一級下の学友Y君らの影響を受けて社会に対して目を開かされ、関心を持ちはじめた。(B)「人格上思想上、非常に大きな影響を受け私は学生運動に参加した」(d)と書く一方、同時に彼は又文学に対しても、ますます敏感になりそして夢中になったともいう。(B)トルストイの「復活」と厨川白村の「苦悶の象徴」に

没頭し、「恋愛と芸術はあたかも人生の中のかなにか至上のものゝ両面を表現しているようで、私の社会行為としたいに矛盾しはじめた」(B)との感慨を持つにいたる。

当時、トルストイの「復活」の中国語訳は、文学研究会の耿濟之によって既に出され、厨川白村は「若悶の象徴」が魯迅によって翻訳されたほか、「近代文学十講」や「文芸思想論」が訳されるなど注目されはじめていた。つまりこれらは文学研究会や魯迅などの文学革命の担い手たちの活動の成果によって、手軽に読めたものであり、胡風も、いわば、普通の文学青年として、性の衝動と文学、恋愛と芸術等に魅かれたわけである。後にこれらを、胡風の文学理論の原形とみなす傾向もあるが、それはやはり強引にすぎる。

むしろここで問題になるのは、これらの読書体験の中で、彼が「芸術」と「社会的行動」即ち文学活動と革命的実践とが彼の意識の中で「矛盾」するものととらえられはじめ、しかもその「矛盾」する両者の間をゆれ動いていたということである。彼はこの両者の「矛盾」を深く検討する暇なく当時の社会的運動の昂揚に反応していった。

「しかし、このように明確に感じた、私の生活の中の矛盾は、五三〇の大海が来るや、混然とした一つのものになってしまった。社会全体が私の眼前で動いており、私は人々の海の中に沈み、一切を忘れてしまった」(B)

即ち、五三〇の時期には胡風も又「当地の街頭と工場の中を奔走する若い学生の中の一人であった。」(C)のである。さて、ここで私は一つの問題にぶつかる。胡風が、一九二五年、或は、第一国内革命戦争時期に、共産主義青年団に入ったという説である。その源は、「關於胡風反革命集團的第三批材料」の「編者按」の次の言葉である。

「胡風は……第一次国内革命戦争時期に、共産主義青年団に入ったことがある。一九二五年彼は北京にいたが、当時段祺瑞統治下の白色テロルに彼はおそろしくて頭が狂い、党が彼に団をぬけるのを許可するようかたく要求した。」(D—e)

第一次国内戦争の時期とは彼が北京に行く前、即ち一九二四年から一九二五年の夏ごろまでの間に限定できる。この按語の筆者が毛沢東だということは、毛沢東選集五巻によって明らかである。恐らくは、それまでの調査の結果として書かれる以上、相当の根拠はあるに違いない。もし無ければわざわざこの問題を持ち出すまでもない。胡風の「反革命」は他の方面では明らかにされた段階であるから。だが、例えば胡風の家庭調査が、「湖北日報」の記事になつたように、この時期についてなぜ当時の胡風を知る人々の証言が発表されないのであらうか。

ところで、ここで、私がこの問題が重要だと思ふのは、胡風がその青春時代に、既にもう日和見主義者であつたことを証明するかどうか、という点にあるのではない。一人の人間の思想の跡をどうつかまえるかという点にある。

胡風が、自らを共産主義者として決意、自覚するのがどの時点かを明らかにすることが重要なのはいうまでもない。それは少くとも自ら確信した生き方に、どのように責任を持ったかが明らかになる。だが、それだけでは不十分である。

もし加盟していたとするならば、やはりその内実が問題とされなければならない。彼がどのように決意し、どこまで深く確信をもって決意したかという問題である。そこを明らかにしないで、脱退だけを問題にするのは片手落ちで

はなかるうか。

私はここで胡風が強固な意志を持っていたなどという気は毛頭ない。正にその逆である。理論的裏付けのない感性的な参加の傾向を感じる。だがこれは胡風だけの問題だったのだろうか。革命の高潮に励まされ、退潮に沈んでいく当時の青年の典型的な姿がここにあると思う。

(4)

内面の矛盾を放置したまま、五三〇の高潮に街頭と工場を奔走した胡風の熱情もそう長くは続かず、五三〇の退潮とともに彼は北京へ行き、その夏「五四以来、全国の青年によって文化の聖地とみなされた北京大学」(C)へ入学する。そしてそこでも満足できず、翌一九二六年には、「新鮮、健康で名を馳せた清華大学」へ転入した。(C)

「五三〇の退潮に乗じて北京に移ってからわずかではあるが、北京のある一種の生活の情調——実は封建社会の雰囲気浸って私は又次第にはるかな思いを寄せることのできる文学の方に傾いていった。私は古典の世界に触れはじめた。

だが、私はまだ若く、その上生活に対する愛着を持っていたので、私を引きつけることが出来たものは、やはり熱く息する現代人のものであった。——農民の特有のしぶとさで、生活におけるすべての苦難に耐えるゾーデルマンの「憂愁夫人」(フラウ・ゾルゲ)、漠々とした氷原のように硬く、冷たいロープシンの「灰色の馬」、私はいつも自己の独特の理解のもとに感激した。当時の日本の社会運動が彼(有島武郎)に与えた影響を知らない

し、又そのために、彼が維持しようとした「理想」の絶対的存在の社会基礎が、しだいに崩潰して流れ出た挽歌のような調子を理解できないが、或は、それ故かも知れないが、有島武郎が「小さき者へ」の中で「無劫の世界」にひざまずくのには、それを読む度に何度も激動して涙をながした。中国の新文学の創作の中に真実の赤裸裸の人生と、それとの闘いを発見したのもこの時期であった。」(B)

胡風はおそらくこれらの作品を翻訳で読んだであろう。そして事実これらの作品はこの時期までに翻訳されている。それは文学革命以来の中国の新文化担い手たちが、嘗々と築きあげてきた遺産でもあるが、文化的教養として提示されたこれらの外国の作品に新鮮な感動を持つことができた胡風の感受性についても注目しておかねばなるまい。

彼が、その中に「赤裸々な人生とそれとの闘い」を発見した中国の新文学というのがどのような作品を想い浮かべて書いているかは定かではないが、ただ一人交流の記録のある作家として魯迅がいる。魯迅日記によれば、一九二六年一月一七日の日曜日(項に「上午得張光人信」とあり、胡風が魯迅に手紙を出したことが知れる。魯迅が返事を出した記録はない。

胡風の手紙が、そのまま魯迅への傾倒を語る証拠とはできないものの、一九三四年から六年にかけての二人の関係を知るものにとって、このような前史があることは極めて興味深い事である。又時期的に胡風が北京大学で魯迅の講義を受けた可能性さえも大いにあると私は思う。

一九二六年清華大学西洋文学系へ転入したのは、何月の事だっただろうか。彼が魯迅に手紙を書いた時は、まだ転校していなかったのではなからうか。というのは一九二六年三月二〇日、即ち、あの「三、一八」の二日後であるが、

胡風には「給死者」という詩がある。前書きによれば三月二〇日は北京に着き死者の血のついた衣服を見て悲憤に耐えずに書いたとある。三・一八当日は北京に居なかったことを意味するのだが、その間を一つの転機とみれば、清華大学転入は、その後のことかも知れない。

胡風が、清華大学の西洋文学科を二年修了するのは一九二九年のことである。その後日本へ渡ることになるのであるが、<sup>(15)</sup>その間、彼はもう一度社会運動に身を投ずることになる。

(5)

「狂潮が南方でうなりはじめると、私は又すべてをなげすめた。」(B)

「(清華大学が)一層満足できないでいるところへ、南方の革命闘争は又怒潮のように発展していたので、私はそこを離れて南下した」(C)

これらの文章を見ると彼が五三〇の時と同じパターンをくりかえしたことがわかる。

南方が具体的にどこを指すかは別にして広東を中心にした国民革命の盛り上りと、北伐軍の戦果に励まされ、北伐から武漢政府へ参加したであろうことは容易に想像がつく。

「初めは食事をする時間もないそがしさの中で時々日記帳やボードレールをひっぱりだして自分を「うるおす」にすぎなかったが、押し流されて力が尽きてしまった時には、ほとんど身をかくすところさえ無いのに気が

ついた。あるものを保持するためにあるものから逃げ、各地を流転せざるを得なかったが、かつての追求或は執着は、頭をもたげることができなかつた。(中略) 生れつき弱い理想主義者は、ここに徹底的に敗北してしまつたのである。」(B)

この叙述は具体性に欠け、彼がどのような立場で、どのような活動をし、四・一二や武漢政府の崩壊をどのように迎えたか釈然としないものが残る。彼は(A)で「武漢時代の後数年間亡命し、日本に滞在したことがある。」とのべていることから、「ほとんど身をかくすところもない」とは蒋介石政府からきびしい追求があつたことを意味するのであろう。

だが(B)と(C)では、それぞれこの時期に対する胡風の認識の力点が微妙に異なっている。Bでは、自分がひ弱な理想主義者であつたが故の敗北と受けとれ、(C)では、革命の環境にあつても、憂鬱な心情にあつたことが強調されている。私は、どちらもそれなりに胡風にとって眞実であつたと思う。

彼は自己の文学的営みと社会的営みを二元的にとらえていた。彼はその詩作にみるかぎり暗い沈んだ気分の中にいる。それにもかかわらず、彼は社会の動きに敏感でその流れの中に身を投ぜざるを得ない。しかし彼の場合は、現実に対する深い認識によつて暗い沈んだ気分が、直持社会的な現実につながつてはいかない。

少くとも彼の詩には現実をどう見るかという視点が無い。又彼の自伝には革命をどうとらえていたのかという分析がない。茅盾のように国民革命の持つていた弱点について分析をすすめるという視点はなく、革命の挫折を専ら自己



の心情の中で自己の理想の挫折としてのみとらえている。彼が社会科学の視點の弱さに気づくのは、日本へ留学して以後のことだが、その時、当時の自己から一線を画そうとしてそれ以前の自分を「理想主義者」時代と概括した。

ところで、一九二七年の蔣介石の四・一二クーデター以後の時期に、胡風は国民党反動派の「勤共工作」に積極的に参加したというのが胡風批判で指摘された罪証の一つである。彼が国民党の特務だといわれるのも遠くここに来源するらしい。胡風自身は、身の置き場もなくなって逃亡生活をしたといい、批判者は、「勤共工作」に参加したとするが、どちらも事実として確定できる程具体的事実を語っていない。

武漢政府が崩壊した後、二九年まで中国に残っていたとすれば、何らかの手段で生計をたてていたはずであり、そこに、我々の知らない複雑な事実があったとしてもそれが、世をあざむく仮の姿であれば、その後の活動の事実が物を言うはずである。胡風が来日以来どのような活動をし、帰国後どのような活動をしたが、ある一つの回答にはなると思う。今は憶測をやめて事実が提示されるのを待つとしよう。

一九二九年の夏の終りに、胡風は「夕陽之歌」という詩を作るが、その詩は、彼の暗い精神生活に暖かい薄日が差したかのようである。この間彼は、故郷を訪れ、北京の清華大学に戻り、一九二九年、清華大学西洋文学系二年終了の資格を得て、後、日本へ渡ることとなる。

〔三〕

(1)

胡風が日本にやって来た時期を確定することはいまのところできない。彼は一九三一年の四月に慶応義塾大学文学部に予科を経ずに直接入学する<sup>(17)</sup>。とすれば事前に日本語の学習期間が有っても不思議ではない。

彼は東亜高等予備学校で日本語を学んだ。この学校は、大正三月一月に元宏文学院教授松本龜次郎によって開設されたもので神田猿樂町にあった。留学生が増加するに従って次第に増設され後(昭和十年四月)には日華学会に移管されて東亜学校となるが、成城学校と並んで最も利用された予備学校である<sup>(18)</sup>。今のところ胡風が、ここで学んだ期間はわからない。この学校が学年制をとらず、講座式で二ヶ月から四ヶ月の期限で、日本語、英語、数学、物理、化学、用器画などを履修させており、又、他の大学や予科との兼修も許していたし、夜学もあったから、胡風が、一年を日本語に費したかどうか不明かではない。更に胡風の出身校は、一年の時は清華大学二年修了と届出られているのに二年の時になって東亜高等予備となっている<sup>(19)</sup>。入学してからそこに通った可能性も全く無いではない。(但し一九三一年の東亜予備在学の名簿には張光人の名は記載されていない。)彼の大学入学前の消息は、今のところ次の事実から推測するのみである。

一九三一年の三月、上海、北新から出た月刊雑誌「青年界」の創刊号「文壇ニュース」<sup>(20)</sup>の執筆者に張光人の名がある。この欄は楊昌溪と共同で執筆し、いくつかのニュースのうち、張光人の担当したものは「一九三〇年ノーベル文

学賞受賞者——シンクレア・ルイス」、「最近のゴリーキーの言論」「坂本設計の新舞台」と三本である。最初のルイスに関する文章は、ルイスの経歴と作品の傾向に対しての見解を示したもので単なるニュースの域を越えて評論に近いもので、後の二つは、ニュース性の強い紹介である。後者の坂本というのは坂本勝のことで「資本論」の劇化に対する紹介であり、ゴリーキーの言論とは、前年のソビエトロシアにおける反革命陰謀の暴露に関するものであり、筆者ははつきりソビエト擁護の立場に立っている。これらの紹介から、張光人が一定の傾向性<sup>11</sup>政治的立場をはつきりと持っていたことが傍証でき、武漢政府の崩壊後挫折感を感じはしたものの政治的立場を変えてしまった訳ではないことは注目してよい。又、これらの記事のうち坂本の紹介は坂本君とわざわざ敬称をつけ坂本の発言をたくさん引用するなど、坂本に非常に近い関係にあったか、そうではなくてもかなり詳しく事情に通じていなければ書けないような仕事である。雑誌の創刊が一九三一年三月上海であることを考えれば張光人が一九三〇年中には日本に来ていたと想像してもよからう。

さて一九三一年四月、胡風は、慶応義塾大学に入学するが、その経緯は、当時の教授会記録によると次の通りである。昭和六年（一九三一年）四月一七日文学部教授会が開かれ、そこで学部第一学年入学者が決定された。（志願者八名中四名を合格とする。四名に対してはそれぞれ面会の上決定のこととする。このうち、一名は取消になり三名が許可となった）更に一名の中国人（張光人）が英文科に入学したいと橋本増吉教授（東洋史）に申し出ているが、これに対しては試験をした上で、その可否を決定することになった。その後、西脇順三郎、畑功阿教授（英文学）の面接試験を受け、入学許可となった。学籍簿によれば入学は一九三一年四月三十日のことである。彼は翌年には、外務省の文化事業部給費生になり毎月七〇円の支給を受けた。<sup>12</sup>一九三三年には、文化事業部選拔生に変わるが五月現在の中

華学会の留學生名簿では「欠席中」の理由で給費を停止されている。彼はこの時すでに留置場の中にいる訳だが、翌六月九日に退学を申出、(成績原簿) 六月十五日付で退学となる。理由は「家事都合」(学籍簿) である。果して届け出たのが本人かどうかは明らかではないが、理由が「家事都合」となっているのは全く手続き上の方便にすぎない。

それはさておき、胡風は恐らく慶応退学と同時に日本を去っている。もし後にあげる資料が信頼できるとするならば、胡風は一九三三年六月一日又は六月一日、神戸から上海にむけて日本官憲の手により強制的に送り返されてしまったのである。但し、彼には、「一九三三年九月東京」と文末に記した論文もあり、又、「一九三三年六月三日病中」とした文章「日本通訊」もあるので、一概に結論づけることはできないが、もし病気になってその為に強制退去が猶予されるようなことがあったとすれば一九三三年九月以降ということもありうるかもしれないが、その可能性は極めて小さい。

胡風が、その留日時期の大半、在籍した慶応大学とは、胡風にとってそもそも何であったのか。彼はそのことについて何も語っていない。青年時代に西洋文学を学び(清華大学) 詩を愛した彼であれば、当時慶応英文科の教授であった西脇順三郎氏の高名に憧れての入学でもあったろうか或いは、<sup>(21)</sup> 経済学部<sup>(22)</sup> に数多くいた湖北省出身者に引かれてのことだろうか。入学の動機はともあれ、それよりも彼にとってより重要な意味を持ったのはこの大学において泉光というマルクス主義文学青年と知りあったことである。

(2)

〔一〕で引用した文章の中にある、プロ科の事務所に連れて行ってくれた友人日比君とは泉光のペンネームの可能

性があると本多秋五氏は指摘する。<sup>(25)</sup>氏には先に次のような文章がある。

「私がプロ科」へ行きはじめたのは三二年の早春だったから張さんに引き合わされたのは、三二年の夏まえのことであつたらうと思う。紹介者はそのころ高島と名乗っていた泉充であつた。泉充は、いまの平野(謙夫人の実兄である。その泉充の高島君は、僕と学校で一緒の人というふうに張さんを紹介したと思う。そのころは、お互いにそんなことはあまりセンサクしない習慣だったから詳しいことは聞いた覚えがないが高島君は慶応の英文の学生だったから、張さんも同じ英文の学生だと受け取っていた。おなじクラスであつたかどうかは今も知らない<sup>(26)</sup>」。

本多氏によれば、泉充氏に知りあつたのは張さん即ち胡風よりも先であつたが、その泉充氏とも前からの知りあいではなく、プロ科で初めて知りあつたそうである。本多氏がプロ科に入ったのは「卒業論文を書き終つたら入ろうと思つていたので一九三二年の一月ではないか」とのことである。

そのころ、「プロ科」の芸術部には芸術理論研究会以下、日本文学、英米文学、フランス文学、ドイツ文学など、各国別の文学研究会があつた。映画や美術や音楽の研究会もあつて芸術理論研究会は、それらすべてをひくくめた意味のものであつたと思うが、文学の方からみた場合には、そういう風に分かれていた。高島君や張さんや山室静は、芸術理論研究会と英米文学研究会に出ていた。だから、張さんに初めて紹介されたのは、各国別の文

学研究会のメンバーが合流する芸術理論研究会のときであつたらうか。<sup>(26)</sup>

この記憶の中には、他に平野謙も登場し、後の「近代文学」の同人の一つの源流がここにあることを物語っているが、それはさておき、一九三二年の Copp 暴圧以後、事務所を使えなくなったこれらの人々は、各々の下宿なども訪ね合つたりしてかえつてより親しい関係になつていった。

一九三三年の三月、逮捕された当時の胡風の住所は、四谷区仲町三丁目二十二番地、高島正實方となつていて、<sup>(27)</sup> 彼  
はここに、泉充と一緒に下宿していたことが確認された。<sup>(28)</sup> 泉充氏と胡風の関係が緊密であつたことは、このことから  
も知れる。泉充について、今回充分な検討を加える余裕を持たなかつたので帰国後胡風とどのような交渉があつたか  
についても何もわからない。泉氏は、その後前田正衛という筆名で『批評』や『現代文学』に執筆しているが平野謙  
氏によれば彼らの仲間のなかで「泉充が最も頑固にマルクス主義文学理論にしがみついていた」(「文学・昭和十年前  
後」) 同様である。

(3)

では、胡風はプロ科に入つていかなる活動をしたのか。中国人留学生である胡風が日本の文化団体で活動するとい  
うことに、一体どのような意味があつたのだろうか。

先ず第一に、彼がプロ科の芸術理論研究会に於て研究会活動に参加したことはいうまでもない。<sup>(29)</sup> これらは、彼の後  
の文学理論の形成に重大な役割を果したことは、後に、彼が発表する論文を紹介する中でのべることとして、ここで

は暫く、伝記的事実に焦点をあてて筆をすすめたい。

張光人の日本における活動が、日本人の側から記録されている最初の時期は、一九三一年の夏頃のことである。張は、プロレタリア作家同盟の一員として登場する。証言者は江口暎である。

「そのころの作家同盟には……中国人作家は張光人ただひとりである。張光人は作家というよりも理論家である。日本語がともうまかったし、上海に拠点をもっていた中国左翼作家連盟（略称左連）にもはいっていたので、日本の作家同盟と中国の左連との連絡をいつもひそかに、そしてたくみにとってこれていた。やや浅黒い面長の顔に一面アバタの跡があるのと、背のすなりとしたからだつきに特徴があった。年は三十五、六だったろうか。ときには谷非とも名乗っている。

作家同盟には中国研究部（？）というものがあって中心的な働き手は藤枝丈夫と張光人と私立の東洋外語学校（？）で中国語をおしえている若い先生との三人である。<sup>(30)</sup>」

この一連の回憶の文章の中で（一）張光人と藤枝丈夫がひどく仲が悪かったこと<sup>(31)</sup>、（二）張光人の紹介で市川の郭沫若訪問の相談があったこと<sup>(32)</sup>、（三）小林多喜二の慎重論が出てその訪問がとり止めになったこと、（四）張光人が「魯迅は主観的にはコミニニストですが客観的にはアナキストですよ。これは動かすことのできない真実であります。」と言った事など、いくつかのエピソードが語られている。

又、張光人と面識のあった人物としては、小林多喜二、中野重治、細田民樹、大宅壮一（貴司山治も？）などが掲

げられ、郭沫若訪問の計画の会合は二度とも大宅壮一の家で行なわれたなど具体的である。

このように、当時の作家同盟の中枢にいた人々となぜ胡風が接触できたのかを考えるとやはり胡風が、中国人であるという特殊な位置を考えざるを得ない。又プロ科に入った胡風が、いつごろだれの紹介で作家同盟とかかわるようになったかはわからないが、プロ科の芸術部会と作家同盟は殆んどメンバーが重なる状態であったからそれほど不思議なことではない。江口氏のいうところによれば左連との連絡を取り、既に左連に加盟もしていたということだがこの点については後で述べたい。

胡風が作家同盟の中で行った活動の中で極立っているのは、「左連」の活動の日本への紹介である。彼は一九三三年一月発行のプロレタリア作家同盟編「プロレタリア文学講座」の第三篇に「中国プロレタリア文学運動の発展」を書いている。<sup>(33)</sup>（一九三二年九月一八日執筆）この文章は、「民主主義的啓蒙運動」として位置づける「五・四」運動から説きおこし、「左連」の今後の方針についてまで取り扱った二〇頁余の論文であるが、特徴的な点は、創造社と太陽社に対して非常にきびしいことである。創造社に対しては、「今までなされなかった文学（芸術）の階級的な基礎と任務の不充分ながら究明及び動揺し苦痛して居るインテリゲンチヤ層に多少とも指針を与えた傾向作品を発表した」ことを一応評価しながらも、「プロレタリアヘゲモニー下のブルジョア民主主義革命の××××××××文学領域における具体的任務を提起したことは一つもなかった」とし郭沫若の「卓子は踊る」は「革命に対する漫然たるロマンチック的な気分の外に何も見いだせない」と手厳しい。太陽社についても、蔣光慈の革命運動の経験に注目している点は、見逃せないが、その理論に関しては、「具体的課題を一つも提出して居なかった」とし、その創作は「プロレタリア文学とは言えない」とする。そして両者の「もう一つの大きい誤謬はプロレタリア文学運動の組織問題を



てんで問題にしまつた事である」として、その「強い宗派主義」を厳しく批判し、とりわけ魯迅に対する態度に関して、「正しい立場からすればどの点から言ってもこう言うような彼を攻撃すべきではない。」とする。

無論、一九三二年の九月の時点で書いているのだから、既に「左連」の結成という事実が存在し、その重みに依拠したものであつたにしろ、当時「左連」の内部は必ずしもじっくり書いていた訳ではなく、又、郭沫若の「創造十年」などから見ても、創造社、太陽社に対する過酷な評価は、左連のメンバーからも反発される可能性もあつたはずである。胡風のこのような評価は、彼の魯迅に対する批判的から肯定的へという評価の転換と当然関連すると見るべきであらう。但し、この時点での胡風の魯迅評価は、前年に江口や小林に語つたという、「主観的にはコミニニストだが、客観的にはアナキストですよ」という敵対的或は揶揄的な評価からは確かに変化しているとは言え、魯迅をコミニニストであると判断している訳ではない。

「彼れ（魯迅）は創作に於いても感想文に於いても××に於いても一步も屈伏せず封建勢力と勢力と戦つて来た。彼の暗黒勢力に対する堅い戦闘精神と個人生活の廉潔さと芸術の高さで全中国のインテリゲンチヤの尊敬を身に集めた。言うまでもなく、彼は人道主義者であつて、コミニニストではなかつた。けれども、彼は何時も解放運動に強い同情を持ち、接近しようとして居る。」（「中国プロレタリア文学運動の発展」）

このように魯迅を人道主義者と規定しつつ、尚「革命の現段階に於て彼の働きが非常に必要である」という観点は、雑誌「無軌列車」に画室（馮雪峯）が発表した「革命と知識階級」に依拠している。彼はこの論文を高く評価し宗派

主義的争いが清算されるのに「決定的役割を演じた」とし、「(画室の)此の批判は組織問題にまで発展して、一九三〇年春の創造社、太陽社、無軌列車等の解散による其の先進的分子から魯迅を含めての『中国左翼作家聯盟』の結成を見るに至った」とする。この文章から、胡風が、「無軌列車」及び画室を特に高く評価していることがわかるであろう。<sup>(24)</sup>馮との関係は後に知られるとおりだが、この時直持の關係があつたかどうかはわからない。

日本の左翼文壇は、主に創造社、太陽社とは早くから交流もあり、中国文学の評価に関してはその影響を強く受けてきた。例えば藤枝丈夫氏は、その読書リストの中に魯迅の著作がなく、又一九三〇年発行の「プロレタリア文学辞典」は中国作家として蔣光慈と郭沫若を掲げるのみであつた。それらは、日本の左翼文壇の魯迅理解が創造社、太陽社との交流の中で行なわれたことの影響を如実に示している。そうした中で胡風のこの紹介は、「左連」の結成という歴史的な事実の重みを反映しながらも尚、胡風の独自の立場と帰国後の彼の左連内での独自の活動をほうふつとさせるものである。

更にこの論文は、「左連」の活動のこれまでの経過と今後の発展の方向について詳しく語っている。伏字が多くわかりにくい点もあるが、(一)それぞれの機関誌の性格や内情について詳しく触れている点、(二)「左連」の活動が、一九三一年の十月頃になって、再び活発になって来た原因の一つに、モルブ第二回大会の決議が十月になって到着したことをあげている点、(三)清算されつつあるとはしながらも、欠点として「宗派主義的傾向、右傾的非政治主義的傾向と政治主義に対する機械的理解、批評理論活動に於ける機械論的觀念論的傾向」をあげている点など、注目すべき論文である。これらのことから、この文章は、個人的な資料整理では到底書くことのできないものであり、組織の内部深く精通していたということは明らかであるが又、同時に、これが、胡風の個性的見解も反映されていることは明らか

である。実はこの文章は、広告の段階では執筆者は「左連」となっていたのだが、後に谷非の著名になっているのは、その辺の事情が関係しているのかも知れない。因に、「魯迅日記」によれば、魯迅は一九三三年三月二二日、この論文の載った「プロレタリア文学講座」第三巻を内山書店で買ひもとめている。

さて胡風の作家同盟での仕事としては現在確認できるのはこれだけであるが、更に彼の作家同盟とその関係を語るものとして、胡風の著になる「秋田雨雀印象記」がある。書いたのは一九三三年の六月のことで、おそらくは帰国後のことだが、その内容は、前年（一九三二年夏）の秋田雨雀との出会いの様子と同時に、日本のプロレタリア作家たちが、過酷な情況の下で、いかにプロレタリア国際主義を発揮して闘っているかという点の紹介である。この文章は、「文学」の一巻二号に秋田雨雀の「我底五十年」の訳と一緒に「日本通訊」として掲載されるが、彼の帰国後最初の仕事である。

これによれば、胡風と秋田雨雀の出会いは一回切りで、E氏（江口渙の可能性が強い）の家を訪ねた時に、そこでたまたま会議をしている人々七・八人と出合ったということである。予告せずにおとずれた胡風に、E氏は「皆来ているよ」と言い、上ってみると、E氏の奥さん以外は誰も知らなかったというから、逆に胡風のその当時の交際の幅はそんなに広いものではなかったことがわかる。この夏の秋田雨雀の日記によれば、江口渙の家で会合した記録が一回あって、それがこの会合だとすると、他に「中条、佐々木、山田、十時、丸山その他の諸君」が列席していたはずである。だが、彼は後に「宮本百合子とはあったことが無い」と書いていて、<sup>(36)</sup>例えこの時會つていても、それが後の宮本百合子と一致しなかったとみえる。話のついでに宮本百合子に関して言えば、プロ科の仲間たち（泉、本多、平野）の中では宮本百合子の評判が比較的たかく、百合子が話す時女性の語尾を使うということが話題になったことが

あり、後に胡風が百合子追悼の文章の中でそのことを書いていて、本多氏は、そのことから胡風がかったの張光人である<sup>(37)</sup>と確信したと語り。

以上、胡風が日本人の中で活動したことを物語る資料はそれほど多くはない。当時、張光人を名乗っていた人物が、後の胡風であることが気付かれたのは、多くの人にとって戦後であったようだ。又当時の非合法に近い活動の状況と、その後の日本帝国主義の中国侵略という厳しい現実が重なり、友人の多くも関係を保つことが出来なかった。さらに、新中国になって、間もなく胡風が失脚してしまったために、遂にかつての事実をお互いに確認することすら困難になってしまったのは残念なことだ。

〔四〕

(一)

胡風が来日後慶応大学で出来た友人の紹介によりプロ科に参加し、作家同盟とも関係を持つに至った経過は以上説明した如くであるが、ここで問題になるのが、その日本時代に「左連」或は留學生の運動と胡風がどのような関係にあったかということである。「左連」に関係していたことはほぼ間違いない事実であるが、いつ、どのように左連に加入したかは明らかでない。

胡風の「左連」への加入は、胡風批判前後の資料では殆んどが、一九三三年頃、或は一九三三年帰国後となっているが、魯迅全集の六巻「答徐懋庸并關於抗日統一戦線問題」の注（一九五八年）では「一九三一年「九・一八」後彼

の反革命の歴史をかくして中国左翼作家連盟にまぎれこみ、内部で分裂を挑発した」とあって、時期に関しては、この方が事実に近い。

「左連」の機関誌との関係でみるならば、一九三一年一〇・二九『北斗』二卷一期（一九三二・一・二〇）に載る「仇敵の祭礼」（詩）が最初である。筆名谷非を使うのはこの時が最初である。

大砲の音が満州の暗い夜空をつんざいた。

そうだ、怒りにもえて、俺はこのニュースを読んだ。

殺したのは誰だ？

「貴国」の人であり、

「敵国」の人でもある。

そして死んだのは、

海の向こうに生きていた我らが兄弟！

海のこちらに生きていた我らが兄弟！

青春の血が、

黄ばもうとする秋草をそめ、

漠々たる大陸のほこりをそめる――

「胡馬は北風にいななく、

「悲壯」に「悲壯」に。

こうした書き出しではじまるこの詩は、彼らが「お国のため」という言葉で流血を神聖化していること、彼らが満州のいたるところに日の丸を立ててまわったのは、膏血をしぼりつくした三つの島の王国（日本）を拡大して、無限にしぼりとれる奴隸王国を再建しようとする夢想しているのだとのべて帝国主義的性格をのべ、戦争にかり出された三軍の「赤子」たちが「大和魂」と愛国心をもたされ、「困窮と圧迫と愚弄され束縛されたあらゆる残酷な記憶をもって」農村や工場からやってきた人々であることを指摘して、「友愛の握手のために伸ばされるべきであった君らの手は／かえって君らと同じ運命にある海に向こうの兄弟たちの鮮血でそまってしまったのだ！／このろうべき罪過は君らの前衛をしてかく叫ばせた／——中国の兄弟を打つな！」と日本において反戦の声があったことをのべる。そして

だが満州の果しなき原野には

大砲が暗い夜空をつんざき

恥ずべき血の惨劇が演じられ、今もつづいているのだ。

君らの、何も知らずに死んでしまった遺骨の前で、

（君らに殺された海のむこうの兄弟たちの屍は、

君らが長官と奉る強盗どもに、写真にとられてみせものにされたのだ！）

私は憤怒にして悲傷ではない輓歌を歌い、  
彼らが君らをして敵国人とみなさせた者たちの祭礼としよう。

そしてその輓歌とは、「君ら甘んじて犠牲となった者よ／悲壮にして恥ずべき者よ」と呼びかけ、最後に「立て全世界の奴隷よ！ 頭上の鉄鎖をとぎ、我らの自由平等の『祖国』を勝ちとれ／その名は『大地』。」と結ぶ。詩としては理念が勝ち、図式とスローガンが目立つけれども、彼の言いたいことは非常にはっきりしている。

「ある街道の坂道で

刀をさげた男が、君ら重い足をひきずる一隊を率いていたのを、僕は見たことがある。

太陽が怒ったように照りつける郊外で

りっぱな馬に乗った男が、君ら息をきらし汗をながしている一隊を率いるのを、僕は見たことがある。

沈んで緊張した顔に

君らの長くつづく歴史の威力をおさえつけ

君らの莫然としたおろかな願いを励ましていた」

というように、具体的イメージの浮かぶところも一部にはあるが、怒りを押さえて、連帯を訴え、イメージよりも論理による説得が強い。「九一八」の受け止め方として読む時、それはプロレタリアートの立場を意識した反帝国主

義とインタナシヨナリズムの観点が強、他の留学生に見られたような民族主義的観点はない。

在日留学生は、九一八事件が起こるや、都下十七校の代表が中華青年会に集り、全体帰国を決議し、大使館に旅費の支給を要求した。(九月二六日) 留日学生監督処は、それに応え、帰国学生の一部に乗船券を発行したこともあった。(一〇月八日)<sup>(38)</sup> こうして、一九三一年五月には三千人を越していた在日留学生の数は、一挙に半分以上の千四百名そこそこになってしまったのだからその衝撃の強さは知れよう。胡風のいた慶応大学の留学生もやはり同様に半減していた。このような運動があるにもかかわらず、胡風は日本に止まった。彼が止まったのは、抗議の気持がなかったからではない。彼は、九一八の本質を帝国主義の侵略と見、戦争を止めさせるには、日本の兵士たちに働きかけねばならないと考えており、日本の階級闘争に参加することを考えていたのだ。そして又、彼は日本の中に多くの同志たちを発見していたのだ。

中国に対しては、この詩は日本の兵士たちはだまされている人民なのだという点が強調され、彼らの前衛たちは必死に「中国の兄弟を打つな／銃の向きをかえよ」と叫んでいるのだとして連帯する相手を示している。この詩に盛り込まれた主張は、当時のまじめな共産主義者の主張と言っても過言ではあるまい。だが、こうした観点に立っていた中国人は胡風一人ではない。例えば同じ頃日本にいた華蒂は一年後に「九一八」記念の為に『文学月報』に、一九三一年九月一九日の東京の街頭で、号外を読む人々の表情を描写し、「みなりのさっぱりした紳士たちは、皆緊張した面持ちで一句一句力をこめて「号外」の見出しを読み、緊張の顔つきの上にしだいに幾分の痛快の色がつけ加った」と書くと同時に、一枚三銭の号外も買えない、うすぎたない労働者や苦力の中では又違った反応を見つけ出して「むちゃくちゃだ。いったいなんで支那をやっつけに行くんだ」「そうだ国内がこんなに貧しいのに、まだ金をたくさん



つかつて戦争する必要があるのか」という意見をのべる労働者を登場させている。そして「敵国にも友人がたくさんいるんだ」という中国人学生の言葉でしめくくっている。

この華蒂も「左連」に関係していた留学生であり、胡風の詩ほど鮮明ではないにしろ、日本にある反帝勢力に注目させようとしている点で共通している。

ここで先の「九一八以後……左連にまぎれこみ」という魯迅全集の注に戻れば、それを単に「左聯」に加盟した時期について限定して考えればそういう可能性も無くはないが、当時の共産主義者、乃至はそのシンパとしての運動に胡風が参加した時期として、「九一八」が契機となつたという意味でいわれるならば正しくない。胡風の「九一八」の受け取め方が、それを証明している。彼は「九一八」以前に既にこうした見地に立っているのである。とすれば、それはやはり、慶応入学後の早い時期、友人日比（＝泉充）との関係によって日本での活動が前提となり、同時に中国の運動にも参加したとみる方が自然ではなからうか。

この後、胡風が「谷非」の名で「左連」の機関紙に登場するのは、『文学月報』第一卷五・六期（一九三二年一月）の「粉飾、歪曲、鉄一般的事実」である。これは第三種人論戦に参加して、雑誌『現代』を批判した評論である。副題を——『現代』第一巻の創作を例として第三種人論争中の中心問題を評するの——とするように、『現代』にのった作品を即第三種人の作品とみているところがあつて、後に巴金の反論なども受けることになるが、その理論点根拠には、当時日本の作家同盟が、目標としていた「唯物弁証法的創作方法」が使われている。

彼はこの論文の中で「プロレタリア文芸理論」に立つことを宣言し、その理論水準を高めることの自覚に立ち、「現実」と「現象」の問題の解明に任務としてとりかかると言う。彼はここで「ある特定の階級の主観が歴史的客観と一

致し、その關係を把んだ時はじめて現象を透して現実を認識でき」、更に、「人の力は歴史發展の一要素であつて、客觀的必然は人の努力を通して實現する」からプロレタリアートの觀點に立つてはじめて「現実」が認識でき、未來を見とおせるという論理を殆んど唯一の武器にして全ての作品を裁断している。又、本文中には殆んど触れられていないが、注で、第三種人論争の根本問題に関して、「同路人」の立場があるだけで、第三種人の立場はないという意見を披露しており、全体としてやはり事情に通じていないためになる生硬さが感じられる。後日、公式化・機械論に反対しつつける胡風にこうした日のあつたことを知るのは興味深い。又彼が、「党派性」の問題に関して周起応すなわち周揚の論文を援用しており、又周揚も、同号に書いた「自由人文学理論検討」(筆名、綺影)の中で谷非(即ち胡風)の文章を援用するなど後の対立とはうらはらに極めて親密なる両者の關係がここでは存在しており、対立の背景の事情が単純ではないことを痛感させられる。

一九三二年十二月一日がこの評論の脱稿の日付であるが、彼はその頃一時日本を離れ上海に居て「左連」の實際活動に参加している。その頃の面白いエピソードがある。<sup>39)</sup>

「一九三二年の冬、私は用事で東京から上海に戻つておよそ一ヶ月程滞在した。当時は一・二八の後で救亡の情熱がわきあがる中で文学運動はとてものはつらつとしており、私もいくつかの学校の文芸団体の講演に参加した。私は上海の情勢にはあまりよく通じてなかつたので情熱にたよるだけだった。友人たちが行けと言つた所に私は行った。事前にはつきりとたずねもしないで準備をした。

ある日丁玲が言うには、海陸豊の鬭争に参加したことのある一人の青年が日本へ留学したがって、上海に

止めようとしても止まりそうにない、行って話してくれないかと。それが（丘）東平であった。（中略）

私は日本へ行かないようにすすめた。一、二年行つたところで得るものはないだろう。国内の實際生活を離れるのは良くないことだと。だが彼は私に反問した。

「それなら、君自身はどうなんだ」

「行つたから様子がわかつたんだ、それで君がいくのには賛成できないんだよ」

「じゃ君はもう戻らないのかい」

私はいささか窮したが、まだやり残したことがあるので戻らねばならないと説明した。

それから数日もせぬうちに『文学月報』に彼の小説「通信員」が出ておどろいたというから、十一月の半ば過ぎであらうか。

胡風はこの上海行の中で、第三種人論争を知り、二人の友人にはげまされて先の論文を書いたといふ。<sup>(40)</sup>

彼はこの時、上海の「左連」の同志たちと親しく議論し、活動した。日本での文学理論の学習の成果を中国の現実の中で一気にぶつけてみるといった気負いもあつたのであろう。上海の同志たちに友情を感じ、中国の現実の中で自分も闘うべきであるという思いが一瞬つのかも知れない。上海滞在中彼は、他に「中国著作家為中蘇復交致蘇聯電」<sup>(41)</sup>の五七名の署名者の一人に加わつたり日本での活動の報告をしたり忙しい一月を過して日本に戻ってくる。十二月一六日以後のことである。だがこの意義深い上海行きは、他方で又いくつかの問題も残している。

その第一は先にあげた「現代」批判の文章を、充分に中国の現実に触れることなく書き残して来たこと。その文章

に対しては早速、蘇汶と巴金から反論が出される。蘇汶の反論は、周起応が彼に『文学月報』を贈り、胡風の文章に対して意見を求めたものであるという。蘇汶も「誤解が氷解した今日、私は意見を公開してよいし又せねばならない」とやや嬉しげに反論している。周揚は編輯者として議論を深めるといふ配慮をしたにすぎないのかも知れないが、一方胡風の側からすれば、精通しない論争にすめられて筆をとり（すすめた友人の一人が周揚の可能性もある）、掲載した雑誌の編輯者が相手に反論をすすめているのはあまり気持ちの良いものではなからう。周揚はいかなる意図でそうしたのだろうか。

第二は、彼がその四月に執筆し、上海の友人に送ったという論文「現段階上の文芸批評之幾個緊要問題」が、「多くの曲折を経て、突然十二月に発表された」ことである。（『現代文化』一期・一九三三年一月）<sup>(42)</sup>

彼のこの論文は、東京で既に公開されたと見えて、「マルクス・レーニン主義芸術学研究改題第二輯」（芸術学研究會・一九三二年叢文閣）の「国際プロレタリア文学運動の諸成果その一」の中国の部分に「現段階に於ける戦争的文芸批評の二つ三つの重要な問題」（谷非）からとして引用されている。この項の執筆者は内村護である。<sup>(43)</sup>

この論文は前掲論文とほぼ同じ理論的立場に立つが、批評論を展開しようとしたところにその特色がある。「一九二七年冬を起点として中国革命はその最高の段階に達した。現在では、すでに直接帝国主義と衝突する決勝の形勢にまで発展している。」との情勢認識の下に書かれ、「無産階級の実践闘争の中では、芸術任務と政治任務は完全に弁証法的統一を得たのだ。」とし「我々の批評も政治的動向を正しくつかまなければ、文芸の任務と階級実践を結合することができない」との見地から、張天翼、丁玲、蓬子、黒炎ら「左連」の新人有力作家の作品を中心に批評をおこなっている。批評の要点は、一、作家の革命の課題からの逃避を指摘しなければならない。二、作品内容の現実に対す

る歪曲を摘発しなければならない。三、主題の積極性の重要さを闡明しなければならない。四、階級の意義を正確に究明しなければならない。五、作家が「前駆戦士」をどのように正確に表現するかを指導しなければならない。六、中間派に対して理論指導をしなければならない。七、似而非文芸理論に対する闘争を強めなければならない。の七点で、それぞれ実際の作品に対して批評をしてみせながら、批評の要点を主張するという方法をとっている。いずれも作品の欠点を指摘するもので作家にとっては厳しいものである。とりわけ新人作家として「左連」の中でも有望視されていた張天翼の作品が、多くやり玉に上っている。その理由を胡風は「偶然手許に彼の作品しかなかった」としながらも「作者（張天翼）は我々のあらゆる作家の中で最も優秀な一人であり、単に優秀な技術（芸術に近い意味か）筆者）才能を持っているばかりでなく、殆んど一篇ごとに、実践課題に近づくことが出来ているので作者が欠点を克服することに対し、我々は希望を持てると思ったからである。」とのべている。そして第二の理由として、批評を党同伐異とみなす中国文壇にあつて、批評者がかまじめになるならばおそらく骨折り損のくたびれもうけという結果になるかも知れないが、筆者は個人的な友情関係によつて作者の諒解が得られることを希望する」と張天翼との同志関係、友情を強調する。その後ともに魯迅の周辺にいて、張天翼と親しかったことはよく知られているが、既にこのころから、胡風は張天翼の作品を集中してよみ敵しい批判を友情の信頼のもとに行なうという関係にあつたのである、後に「林語堂論」と並んで、胡風の批評家としての代表作になる、「張天翼論」が成立するきっかけはすでにここにあるのである。

それはともかく、ここで問題になるのは彼がこの中で「主題の積極性」という中国のプロ文壇ではまだ耳なれぬ用語を提起したことである。彼は後に「問題の提出の方法に欠陥があつた」ので、充分理解されず、賛否両論ともに、

明確に要点をつかんでももらえなかったとして再度論文を書くことになる。

もともと「主題の積極性」は、主題と方法の問題をめぐるラップの論争を踏まえ、蔵原惟人が谷本清のペンネームで、『ナップ』（一九三一年九・十月）に「芸術的方法についての感想」で提起したものであり、先に『ナップ』芸術家の新しい任務』（『戦旗』一九三〇・五）で提起した「我々の芸術家が、わがプロレタリアートとその党が現在において当面している課題を、自らの芸術的課題とする」という立場の下に「もしも彼が共産主義者であるならば、第一にプロレタリアートとその党の必要から全然かけ離れた題材を取り扱うことは出来ないであろうし、第二に彼はあらゆる問題をその時代におけるプロレタリアートの革命的課題と結びつけるところの『前衛の観点』をもってその題材に向かうであろう」と主張してきた方向に対して、ナップの内の一部の作家や批評家から、それが題材の「固定化」につながるといふことがいわれ、それへの反論として、一步深めて提出されたものである。

胡風がその論文を書いたのは翌年の四月であるから当時この論文を読んではいただろう。だが、胡風の問題の提起は上海の作家たちからみれば唐突であり、その内容についても蔵原の提起とは若干のズレがある。

蔵原は、題材と主題を区別し「何を」を、切り離されたものとしてではなくて、全体の一部として理解すること、およびその問題を「いかに」といふ問題と結びつけて、「何をいかに」描くかというふうな問題を提出し「それはすでに、抽象化された個々の「題材」ではなくて、全体の一部としての作品の中心的題材とそれに対する作家の見方を含むところの主題（テーマ）の問題である。しかし、この主題の問題は方法の問題と密接に結びついている。反対に、方法の問題は主題の問題を離れて論議することは出来ない。」と主張する。

胡風も「いわゆる闘争の主題とは、専らストライキや小作争義、兵士の叛乱といった闘争場面を指して言うのでは

ない。無産階級とその同盟者の生活の中に、闘争の主題は随時に存在しているのだ。いいかえれば、闘争の主題とは、一方で無産階級とその同盟者の敵階級に対する尖鋭化した階級戦を指すのであり、一方で、機會主義、虚無主義者、敗北主義者、に反して、無産階級とその同盟者が日常生活の中で敵階級に対して取る一種の、不<sub>レ</sub>断<sub>、</sub>進<sub>、</sub>攻<sub>、</sub>の<sub>、</sub>態<sub>、</sub>度<sub>、</sub>を指すのである」とのべており一応は題材と主題の区別は自覚しているもののそれを芸術の方法として展開せず専ら態度の問題に還元している。彼はこの問題を、近ごろ上海で流行している、「否定」「否定の否定」という創作方法に対してとりあげる。「否定から出発したら、無政府主義の立場も立てられるし、社会民主主義とトロツキスト陳独秀取消派の立場もたてられるし、あまつさえ第三党の立場をたてることもできる」「『否定』とは最も危険性の大きい機會主義のスローガンであり、ただ『主題の積極性』という課題を正しく理解してはじめて、この機會主義的スローガンを徹底的に清算することができる」と主張するのを見る時、蔵原がこの問題を提起した真意をつかんでいるとはいえない。

彼は例として張天翼の「鬼土日記」をあげ「一般的な風刺に止まっ<sub>レ</sub>ていて、資本主義の現段階の本質に対する認識を獲得していない」とする。胡風のこの批判は、「鬼土日記」に関する限り、私も当たっていると思う。だがその為に「主題の積極性」スローガンを持ち出す必要があったとは思えない。やはり唐突であり、説明も不充分である。彼が蔵原の「芸術的方法についての感想」の主旨をつかんで再度「關於『主題的積極性』及與之相關的問題」を書くのは一九三三年帰国後のことである。<sup>(4)</sup>

今この論文にまで触れることはできないが、彼が学んだばかりの理論を中国の現実にあてはめようとして、その生硬さの故に摩擦を生じていく気配が、そこからは感じられる。

一九三二年一二月、胡風はおそらく前記論文に対する批判の声を聞きながら、充分説明するいとまもなく再び東京に戻ってきた。或は『現代文化』に発表されたこと自体彼の本意ではなかったかも知れない。

「左連」との関係は以上見てきたとおりである。一九三一年以降で、日本の組織に登場する中国人は胡風一人だけであるということから考えて、胡風が日本の「作家同盟」と「左連」との連絡をはかったとする江口渙の証言は信用できそうである。(例えば先に挙げた華蒂など他にもそういう役割を果たした人がいることを否定するものではない。<sup>(31)</sup>だとすると、胡風は一体どちらの組織に属していたのだろうか。或は両方の組織に属していたのだろうか。

一九三二年四月「作家同盟」書記局の活動報告には、中国プロレタリア小説「上海の怒号」の翻訳出版計画中(十六)、台湾文芸作家協会との連絡をはかる(廿一)等と並んで「革命作家同盟の東洋支部の連絡を緊密にすること。中国左翼作家聯盟員、東京在住者は、原則としてわが同盟東京支部に入ること<sup>(45)</sup>に決定。(廿三)」とある。

この決定は、直接的には、一九三二年二月国際革命作家同盟(モルプ)に正式加盟し、モルプの日本支部となったことを契機として必然的に出てくる結論である。なぜなら中国の左翼作家連盟もやはりモルプの支部であり、いわば共産党と同じ属地主義的組織をとることが可能となったからである。先の江口渙の記憶を信頼するならば、この項目は胡風に適用されるものであり、胡風が先にどちらの組織に加っていたとしても、原則的には、この決定で同じことになる。だが一四〇〇名を起す中国人留学生の中で活動する彼らには、それなりの方針が必要であり、その方針を日本の組織が責任をもって指導できるかどうかは当然問題になったであろう。だが、胡風は、原則に対して忠実に日本の組織に加盟し、活動をした。一九三二年の春から彼は同郷の留学生数人と「新興文化研究会」を始める。



「新興文化研究会」(以下文化研と略す)は「赤色支那」によれば一九三二年三月下旬、早稲田大学政治経済学部二年の方瀚<sup>(47)</sup>、慶応大学の張光人、それに無学籍・聶衣葛(紺弩)<sup>(48)</sup>、樓憲等四人が、「左連」の指導の下に組織した。方瀚が総務となり、その下に書記局を置き、聶衣葛と張光人、即ち胡風が書記局長となった。その他のメンバーとしては、王承志<sup>(49)</sup>、周頴<sup>(50)</sup>などがある。「左連」の指導下に出来たとはいえ、これらの人々は、湖北省出身者に偏っている。方瀚は張光人と同じ湖北省蕪春県出身であり王承志も湖北省漢陽県の出身、聶紺弩は湖北省京山の出身であり、周頴は、河北省出身であるが彼女は聶紺弩の妻であり、又方瀚と同じ早稲田大学政治経済学部在籍していた。

「文化研」は機関紙『文化闘争』を一期から四期まで出し、その後『文化之光』(一九三二年十月)を出版している。現在見ることの出来るのは『文化之光』のコピー<sup>(51)</sup>だけであり、編集後記を読むかぎり、それも「文化研」の機関紙という形はとっていない。が、事実上の機関誌とみなしてよいと思う。即ち、「左連東京特別支部」の声明一件、「文化研」の正式文献を三件も掲載し、且つ記事の全てが「文化研」の立場(後に述べることになるが「社研」との論争が行なわれていた)に立ったものであるにもかかわらず、それらは来稿という形をとっている。これは、恐らく、その直前の『国民新聞』一九三二年九月二六日夕刊の記事と関連すると思われる。そこには「百余名の支那学生 またもや潜行運動 近く大検挙」の見出しで、新興文化研究会について次のように述べている。

「彼らは早、明両大学生を中心に新興文化研究会なる文化サークルを組織し、文化闘争団体の名目で巧に潜行

運動を継続し、早大生汪某(二七) 明大生金某(二四)の兩名を書記局とし、一、國民政府打到、一、日本帝國主義打到の一般スローガンを掲げて両國民に働きかけんとしたもので……」

更にこの記事ではこの運動が、中國共產黨及び日本共產黨と巧妙な連絡をとっており、三・一五、四・一六事件當時中國共產黨日本特別支部<sup>(53)</sup>として活躍した尖銳分子も含まれており<sup>(54)</sup>としている。

この記事に対して「文化研」は翌二七日付で「對於國民新聞造謠中傷的抗議」という声明を發し『文化之光』に發表している。その中で「三・一五と四・一六殘留分子と關係がある」「中國共產黨、日本共產黨と密接な關係を持っている」という点は根拠のないデマだとしている。當時の特高が文化運動を共產黨と關係づけ治安維持法にひっかけようとしていたことは事實であり、『國民新聞』の記事も、特高から流れたであろう情報を「大檢拳」の予告つきで載せるといふ惡質なものである。「文化研」は抗議しつつも、「文化闘争」という機關誌を止めて、形だけは「文化之光」編集委と「文化研」とを一応別にしたと考えられる。

「九・一八」一週年に出す予定であつた」と編集後記にある様に、その誌面の大半が、九一八以後の情勢の分析と方針提起に充てられている。文芸問題に關するものは三件しかなく他は殆んど政治論文である。「一省或は數省で先ず勝利する」という中國共產黨の方針の正しさを主張する、中國赤軍の勝利についての記事を「北方紅旗」から転載し又、「帝國主義とその走狗國民黨を打倒する偉大な革命任務」を柱とするなど文化研は明らかに當時の中共中央の方針を尊重していることがわかるが、在日留學生の運動を反映して、文章全体の調子は、反帝、とりわけ日本日本帝國主義に反對することが重点となっているのは当然であるう。

文芸問題に関する文献のうち『大衆文芸』的文献解題」は、左連の機関誌に載った、洛陽、宋陽、史鉄児の論文の紹介であり、「關於『民族主義文芸』的幾点史料」は、蔣介石国民党政府が「反革命的任務を完成」した結果、二九年と三〇年にかけては新興文芸と社会科学の繁栄を許した文化面で、「革命的任務」として「民族主義文芸」のソローガンを出して来たと位置づけ、その活動の中心として国民党中央宣伝部主宰の中国文芸社と、「民族主義作家同盟」の発起人向培良を紹介している。これらはいずれも当時の「左連」の活動を基盤として、踏襲するものであり、これから中国の文化情況についての発言のほか、日本に関するものとして黄草署名の「中国湖南省」の書評があげられる。それは『久保栄研究』九号で既に竹内実氏らによって論じられているので詳しく触れないが同戯曲がソ区に対する帝國主義とその走狗国民党の圧迫を見落としている点、李立三主義の危険性は描いているが、その社会的基礎を理解していない点など問題があるとしながら、ソ区の建設と水害の克服という大テーマを統一してとらえており、「主題の積極性」と「党派性」の面ですぐれたものであるとして、華僑及び留学生は是非観て批評しようと呼びかけている。その批評の観点は、当時の作家同盟とプロ科の中で行なわれていたものと同質であり、先に紹介した胡風の批評論文の論点とも一致する。

さて、これらの諸文章と並んで見落すことのできないものに「社研」即ち「中国社会科学研究会日本分会」<sup>(55)</sup>との論争がある。翳鍋の「休矣科学半月刊」及び袖駕の「答『科学』对『文斗』」<sup>(56)</sup>第四期的批判」で、どちらも来稿という形をとっている。翳鍋及び袖駕は勿論ペンネームであろう。

「社研」との論争は、前から続いていたようであるが、この二つの文章でみるかぎり先ず「文化研」が『文化闘争』第四期に於て「社研」に対して問題を提起（これが何かはわからない）。それに対して、「社研」側は、「科学」半月

刊に「社研」分会の声明書と、「科学」編集委員会の声明書を發表して解答した。「文化研」の二つの文章は、それを受けて書かれたものであるが、これらの社研側の声明に対して「面子主義、風頭主義」という批判をしている。論争の内容は、一つは、『文化闘争』の二期に「中国革命の現段階は無産階級革命である」という言葉があったことに對する「社研」の批判（『文化闘争』は三、四期では「プロレタリアートが指導するブルジョアジーの民主主義革命と訂正している）や「社研」が「過去の「銀座事件、大岡山事件、公使館事件、沙基慘案大会や、九一八事件後の帰国運動、公使館を包囲し、青年会（不明）東北苑における難同胞追悼会等々の闘争の歴史の中で（その名を）大衆に知られており、去年上海に派遣した（社研の）同志が指導して留日学生会が市政府を包囲し張群に対する闘争を勝利させ、又九一八事変及上海一二八事変の市民大会やデモに参加し、多くの（社研の）同志が上海の無産階級に知られ、又多くの同志が上海に派遣されて指導している」等の「社研の闘争の歴史を「文化研」の執筆者は少しも知らない」と誇りかつ非難する（「科学」編輯委声明）のに対して、「文化研」はそれらの事件は本「社研」とは関係のないことだとし、上海へ派遣して指導したなどはおがましい「風頭主義（でしゃばり）」だと断じている。

たしかに一九二九年ごろ、在日留学生の中で活躍した「社研」は、それらの運動に指導的役割を果たしたようである。<sup>(53)</sup>だが、その関係者は殆んど逮捕、送還されて、留学生の運動は一時中断してしまい、一九三一年九一八以後、運動が再燃し「満洲国」の成立や一二八上海事件、大洪水の救援等を契機として運動が再構築されている過程で、過去の運動からの継続の正統性を主張する「社研」の発言は、「文化研」にとって目に余るものがあつたであろう。

このように論争は、留学生の運動、とりわけ水害に対する救援運動で盛り上つた留学生の中における指導権をめぐるセクト的争いの観を呈している。どちらも「左翼文化総同盟」に加盟する「社研」「左連」がそれぞれ同じ時

期に日本で組織活動をはじめた訳であるが、同志的連帯を持ってしかなるべき二つの団体が、一体なぜこのような指導権争いを演ずることになったのであろうか。そこには、「文化研」の構成員が、湖北省出身者及び早稲田大学生で占められており反対に「社研」の方は、法政、明治、高師、などの学生によって占められている点などにも現われているように組織する過程が個人的つながりによったことから生じたセクト主義が大きな原因になっていることは容易に想像できる。だが果してそれだけで済まされる問題であつたらうか。

(3)

この両者の対立が深刻になっていくにつれて、「中国左翼文化総同盟」も事態を無視できなくなり、来日の機会があつた楼適夷にその解決の為の労をとるよう依頼する。その間の事情を説明するものとして、「エツプ」の機関誌『プロレタリア文化』に中国文化総同盟代表適(楼適夷)筆者)の名で発表された『新興文化研究会』(文化研)と『中国社会科学研究会日本分会』(社研)との紛争について声明する」という文章(日本語)がある。<sup>56)</sup>

この声明は雑誌で一頁分でありそんなに長いものではないが、要約すると以下のようなになる。

一九三二年の中頃から「社研」と「文化研」との間には紛争が続いた。双方の攻撃は個人に及び、上海における過去の関係の指摘にまで及んだ。(特に社研の不良分子が密告問題をおこした)中国文化総同盟は、解決に乗り出し、用事で日本に來た楼適夷に、左連東京特別支部責任者と協力して紛争解決の方案を作成するよう依頼した。三週間の調査と懇談により次のように結論する。紛争の原因は、主に「社研」の側にある。無責任な他組織批判と、革命的日本文化組織の信用と連絡とを取ろうとしなかつたことにある。一方「文化研」の組織方針は正確であり活動も成果を

収めたが部分的欠点として「社研」の批判にセクト的態度をとった。以上の結論から具体的方針として三点をあげる。

(一)、即時に攻撃を停止せよ。この度の紛争に対する批判は中国文総及び関係ある文化組織に行ふ（文化研から提出した社研の不良分子が密告したことの責任問題をも含む）

(二) 両組織は同時に解消し、日本文化組織の指導を受け、活動の方式を改変せよ。

これに関して本代表は日本組織の側と具体的な決定を取得した。「文化研」のこの方面に対する活動は既に相  
当な成果があつた。唯双方が指適したメンバーの問題は上海方面で過去との関係を具体的に調査することにす  
る。

同時に両団体はすべからず積極的に自己批判をなし、厳格に検査した後更に改めて文総から責任を持って日本組織  
に紹介する。

(三) 再組織の進行中、「社研」の全メンバーは従来の他組織に対する逃避的態度について批判を行ひ、日本文  
化組織の指導を受けることはいふまでもない。同時に「文化研」と相互に協力して進まなければならない。」

ここにあげた要約と方針の引用（全文）から、問題の中心点が、その背後には個人的感情やセクト主義があつて一  
層問題をこじらせたとはいへ、日本の文化組織の指導下に入るかどうかにあることがわかる。（少くとも解決に当  
た適夷の判断はそうである）「裏面に雑多の個人的感情を混入してゐる中国の組織はこちらの事情について詳しく知る  
ことが出来ない」ともいふべっているのは、或は本国の活動家の内部の人脈や対立と結びついているという判断があるの  
かも知れないが、今はこの点は問わないことにする。

この中で指摘されている「『社研』の不良分子が密告した」こと「双方が指摘したメンバーの問題」とはそれぞれどのような問題なのであろう。前者に関していえば、前述の「国民新聞」に「文化研」に関するデマ記事が載ったことが思い起こされる。特高から情報が流れたと思われ、正式なニュースではなく、内容も不正確であるが、事実と符合する点もあり単に機関誌を見た（非売品であるが）だけではない。事情を知るものから漏れた可能性もありうるかもしれない。「文化研」側はそれを「社研」の密告ととらえたのであろうか。この記事がなぜ「国民新聞」一紙だけに現われたのかも謎である。

又、後者に関して考えるならば、そこには「四一二」以後の中国の情勢の複雑さを背景としていることは言うまでもない。後に胡風に関して、「勤共」に積極的に参加した前歴を隠してまぎれこんだとする批判も同じ背景から生じている。例えば、聶紺弩と周穎について言えば、一九二七年聶紺弩は南京中央政治学校の教師をしており、同年同校に入学した周穎は翌二八年六月卒業して同校の職員となり、十一月に二人は結婚しているという。（赤色支那）「四一二」後の南京の「中央政治学校」の意味するものとそこで教師をしているという経歴を表面的にとらえるならば或はここでいうメンバーの経歴という点でひっかかるものがあつたかも知れない。なお、その聶紺弩夫婦も帰国後、魯迅の所に親しく出入し、葉紫や肅軍夫妻、胡風夫妻等とともに二度も魯迅に会食に招かれている程である。<sup>(58)</sup> 経歴をさぐるということがいかに難しいことであり、一方的な決め付けがいかに判断を誤らせるかとこれらの事実は物語っているであらう。

さて本筋に戻って適夷の解決策は左翼運動の原則に忠実である。だが原則的であるかぎり「文化研」に有利ならざるを得ない。更に適夷は「左連東京特別支部」の同志と協力したとある。「文化研」は「左連」の影響下にあつたし、

『文化之光』には「左連東京特別支部」の声明が載るなど極めて親しい関係にあった。殆んど同じものであったともいえる。一九三二年四月に発表された「作家同盟」の決定が生きているならば、それは「作家同盟東京支部」に所属しているはずであり、胡風はそのメンバーであった可能性が強いことも前にのべた。更に、一九三二年の冬、胡風は上海に滞在していたことは明らかだから、適夷が「上海出発に臨んで、文化総同盟の側から左連東京特別支部責任者の同志と協力して、この紛争を解決する」よう依頼されたのには、胡風が強く関係していると思われる。胡風自身が「左連東京特別支部の部の責任者の同志」にあたるかどうかは決め手がないが、彼が適夷の出発前に上海にいて発言でき、適夷とほぼ同じころ東京に戻っているから適夷の判断に関与した可能性は大である。

こうして、「文化研」に有利であり且つ組織論的に日本の文化運動の指導を受けよという声明に対して、「社研」は、これに反対する声明を出した上、(「社研日本分会全体会員の重要声明」) 総務漆憲章が上海に行き「上海反帝同盟」や「中国社会科学連盟」「中国左翼文化総同盟」のメンバーと意見を交換した。一方、一月二九日帰国した適夷は「中国左翼文化総同盟中央常任委員会」の決議を漆憲章に手渡し「留日一切の革命団体は国際連帯性の組織系統下に成立すべきものなるも以て留日同志は日本プロレタリア文化聯盟に加入し、日本同志の貴重なる経験を学習し、左翼運動の幹部人材を養成し、これを続々本国に送り国内闘争力量を充実すべきである」という重大指示をなしたという。(「赤色支那」)

かくて二月四日、帰京した漆憲章は「プロレタリア科学」同盟員でコップ関係者の浅川兼次と会見、その仲介で「文化研」の方翰と話し合った結果、両組織を同時に解散し「日本プロレタリア文化聯盟」の指導下に「日本プロレタリア科学同盟華僑班」を日本人と共同で組織し、三月八日「成立宣言」を發したという。(「赤色支那」)



「プロ科」の機関誌には、こうした事実を裏付けうる記事をみつけ出すことはできない。又、当時胡風と「プロ科」芸術理論研究会で一緒だった本多秋五氏も、聞いたことが無いという。「プロ科」の組織も一九三二年春以来厳しい弾圧下にあつて、事務所である江戸ビルを使用することもままならぬ情況にあつて、これらがどのような手続きを経て行なわれたかを確認することは難しい。もしこれを事実とするならば、先に日本人の友人によつて「プロ科」を紹介され、加入して、日本人とともに活動を初めた胡風の経歴は、その後、幾多の曲折はあつたにもかかわらず、中国人留學生の日本における活動のスタイルとして公認されたのであり、胡風は、その意味で正に先駆的ということになる。

三月八日の宣言（「赤色支那」による）は

「従来の文化研究会と社会科学研究会日本分会との対立は如上の組織原則に通ぜざるために錯誤を生じて、兩者共その行動梗塞するに至つたのは要するに結合闘争を欠いたためである。之に対し中国文化研究会と日本文化聯盟とは既に上述の錯誤を指摘し且つ中国文化総聯盟は一つの決議をなした。即ち従来の組織を一切解消して日本文化聯盟下の各文化団体に入り、積極的に日本労働大衆の闘争に参加せんとするものである。」

と述べているが、「プロ科華僑班」を手はじめとして、各文化団体も「コップ」の指導の下に組織される手筈になつていた。即ち、華僑留學生間の運動に止まらず、日本の闘争の中に組み込まれることとなつたのである。

だが実際には、わずか十日もたたぬ三月一五日、華僑留學生の大衆組織である水害救援のために出来た「中華留日各

界救済国内難民聯合会」のメンバー十七名が検挙され、幸づる式に、翌一六日「社研」の漆憲章以下二名、翌一七日「文化研」方翰と浅川兼次が、そして翌一八日には「文化研」王承志、周頴ら四名が検挙された。(「赤色支那」胡風は恐らく聶紺弩と一緒にこの最後のグループに入っていたであろう。当時の日本の新聞『国民新聞』(かつて「文化研」に対するデマと検挙の予想を流した)は次のように伝えている。

「在留抗日団の中に日本人も加入運動す／吉川仁を鳥居坂署に検挙／日本共産党とも連絡／(以上見出し) 既報故国の水害救済に名を藉りて七百余名の会員を擁し、猛烈な抗日運動を行なっていたことが發覚して検挙された神田区北神保町一〇中華キリスト教青年会館内の中華留日各界救済国内難民聯合会首脳部東京医専生汪盛盟(二二六)以下一九名は各署に分割留置のまま警視庁外事課より山路アジア係長、中条警部らが出張し連日嚴重な取調をつづけているが首脳部はいづれも中国共産黨員で上海社会科学総聯盟の指令を受け、日本共産党とも連絡をとり、抗日運動を通じて在日同国人の赤化をも計っていた事実が判明した……以下略」

そして彼らに自宅を秘密印刷所として提供し、日本共産党との連絡にもあたった日本人として麻布区広尾町吉川仁(二二七)、コップ加盟員)を逮捕したという。

又、続いて三月二四日『国民新聞』は続報として「抗日学生的首脳部／汪等に退却を命ず／仮面に隠れ赤化運動」と題する記事をのせ

「……取調の結果、檢挙された在留抗日団は本国の抗日団体の指揮下にあり更に各国に留学している中華留學生団体とも緊密な連絡を持つて強力な抗日運動をつづけていたことが判明、更に彼等は表面合法的な中華留日救難国難救民会を組織しその仮面の下に共産黨員汪盛明<sup>マツモト</sup>等が会の実権を握つて同会を党の勢力下におき、全學生を煽動し軍費の調達は勿論、日支國際關係の動搖に乗じて留學生を動員、學生運動に名をかりて不穩計画をしていた事実が暴露したので、警視庁では内務省、外務省に取調の内容を報告、汪ら首腦部の退去処分を行ふことになつた」

と記している。(東京朝日新聞も三月二一日夕刊に同様の記事を載せている。主謀汪盛模<sup>マツモト</sup>とする他、檢挙者一九名とするなど「国民新聞」とほぼ同内容である。)

この記事は、水害見舞金のカンパ活動を軍事資金とするなど歪曲した大袈裟なものであるが、但注目すべきことは、「新興文化研」について一言も触れていないことである。かつて『国民新聞』は「文化研」についての檢挙予想を記事にしているのであり「既報」とはその事であつたはずで、ここでは鬼の首を取つたように書きたても良いはずであるが、それをせず又、檢挙の人数も一九名として、一五日と一六日檢挙の分に限り、浅川と「新興文化研」のメンバーを除いたのは、一貫した理由があると見なければならぬ。その理由は、新聞社ではなく無論警視庁側の理由であらう。

私はそれを日本共産党との直接の關係を疑つた為であると考へる。先に述べたように「社研」と「文化研」の対立に日本の運動の指導下に入るべきかどうかという問題があつた。胡風が日本の文化組織に加入していたことは既にの

べたが、他のメンバーはどうだったのだろうか。「文化研」指導部の方瀚、王承志は、「日本共産黨員」であることが判明したとして直ちに起訴収容され、他の二十二名と別に扱われている。

「赤色支那」によれば、方瀚、王承志は、朝鮮人、鄭雲祥と連絡して「日本反帝同盟」に加入し、一九三二年十月からは「赤旗友の会」を組織して他の會員に配布し、一九三三年二月中旬に「日本共産党に入党の手続きを取り履歴書を黨員村山某に手交、同年二月下旬党の上部から正式入党の承認を受けた」とする。当時の入党手続がこのようであったかについてははなはだ疑問があり、彼ら二人を日本共産黨員とするこの資料の評価には慎重であるべきだ。だが、「特高月報」、昭和八年六月「日本共産党の運動状況」の治安維持法違反の一覽表にも、彼ら二人が掲げられており、それぞれ三月一七日、三月一八日に検挙され、六月九日同時に東京地方委員会、調査部員、メンバーとして起訴されているのを見れば、そうした扱いを受けたこと自体は事実である。つまり彼らが他の留学生と比していかに日本の運動と深い関係にあったことがわかり、これは文化研の性格を考える上で参考になると思う。

胡風は自身、日本の文化運動に深くかわっていたにもかかわらず、恐らくは、その合法性の枠内での活動であったために（或は、そのことも気づかれずに）三ヶ月の拘留の後、六月強制送還されたのである。

方瀚、王承志を除く二二名は、六月七日内務省訓第一五〇五号を以って内務大臣より退去命令を發せられ、内一七名は、同月十二日、二回に亘り東京駅を出発、翌十三日神戸出帆の長崎丸に乗船、他の五名は、同月十四日午後七時三十分東京駅を出発、十五日神戸出帆の箱根丸にのつて上海に向かった。（「外事警察報」）

一名に付き警官一名の嚴重な監視つきで神戸まで連行され、日本最後の寄港地である福岡と長崎の両県に対して特に警視總監の名を以って嚴重監視を通謀した（「赤色支那」とあるからこの事件がいかに日本の官憲の肝を冷したか

想像できるところであるが、当の留学生たちは、自分たちを待ち受ける運命に対して深い危惧を抱かざるを得ない情況であつたらう。

胡風は中野署に拘置されている時、そこでプロ科の同志であり親しい友人であつた青山こと山室静と出合つて<sup>(6)</sup>いる。十日かそれ以上一緒に居た山室は、胡風が「本国へ強制送還されれば殺されるだろうと悲しんでいた」と後に語つた<sup>(6)</sup>といふ。

彼にそうした推測をさせた根拠には、取調べにおける過酷な取り扱いとそうした言葉による特高の恫かつがあつたのではなからうか。

後は後に矢崎弾が逮捕されたというニュースを聞いて身を安じ「憶矢崎弾」という文章を書く。その中で、矢崎の鋭敏な中に誠実さのこもつた顔つきを思い浮かべるとともに「又、私自身が受けたことのある日本警察の野蛮な拷問方法を思い出し、一種のいきどおりと懐しさのまじりあつた感覚におそわれるのを感じた」と言っているが、日本の帝国主義的侵略政策とその下で行なわれた徹底した人民弾圧のその両方を極めて如実に語るものとして我々はこの事実を受け止めねばなるまい。

彼のこの体験は、その直後に書かれた「秋田雨雀印象記」と後の「亡国奴諸相」でも触れられているが、彼はそのことからむしろ、同じくとらえられて弾圧されている日本の同志たちへの連帯へと筆をすすめている。

彼はいう。

「日本の労苦せる大衆の闘争の前途は光り輝いてはいるものの、苦しいものであり、残酷な迫害に直面してい

る。去年（一九三二年）の四月以来、鬭争は真紅の血の跡を帯びている。（中略）蔵原惟人、小川信一、寺島一夫、平田良衛、……の如きは、皆白色テロの暴風雨の下で支配階級政府に奮い去られた。彼（秋田雨雀）は「大いなる悲哀」と「大いなる憤怒」で彼らを記念している。しかし彼は「決して失望しない」。彼は「プロレタリアートは必ず勝利できると信じている」。暴圧はただ彼をして「憤怒」せしむるだけで、彼を退却させることはできない。彼は、屹然と日本の労働者農民労苦せる大衆の陣営に立ちつづけるであろう」（秋田雨雀印象記）

「一九三三年六月三〇日病中」と記されたこの文章は、秋田雨雀に向けられたものであるが、それはそのまま日本を去るに当って日本のプロレタリア文化運動に対してなされた胡風のメッセージであった。

そして先にかかげた「武蔵野の歌」は上海で活動をはじめた胡風の、青山こと山室静を多分イメージに置きながら日本のプロレタリア文化運動への連帯の表明と読むべきであろう。

### おわりに

以上、私はできるかぎり事実即して胡風の足跡をたどってきた。そしてようやく日本を去る一九三三年にたどりついたに過ぎない。この後、上海に帰った胡風がどのような生活を送ることになるのか、そして「左連」とはどういう関係をもち、魯迅にはどのようなように近づいて行くのか、そしてそれらのことに、この日本で留学時代はどのように響いているのか。本稿は本来そこまですべてを予定して書きはじめた。

だが、それらについての私の調査は充分でなく、又、紙数も期限も既に予定を大幅にオーバーしてしまい、私は一まずここで筆を置いて後日を期することにせざるを得ない。

又、私の不勉強から、胡風の著作を当時の日本のプロレタリア文学の理論史の中に位置づける作業も極めて不充分なものになってしまった。

だが、ここに書いた伝記的事実は、これまであまり知られていなかったし、又殆んど取りあげられても来なかった。私の手に入れることの出来た資料は、胡風の生活からみればほんの一部であり、それらの断片を継ぎ合わせたところで、実際とはまだまだかけ離れているに違いない。ただ、私が書いたことがきつかけとなつて、更に、事実が明らかになることを秘かに念じている。日本には、まだ直接胡風を知る人も多いはずであり、当時の資料もどこかにねむっているかも知れない。

最後に、注の中に記した諸氏にはいろいろ貴重な資料の便宜をはかつて頂き、ここで改めて感謝の意を表します。又、病気で療養の為、年余の中断からこの論文に再度取り組むよう励まして下さった尾上先生、丸山先生、をはじめ「三十年代文学研究会」の諸兄、その他の方々への協力に深く感謝の意を記して筆を置きます。

#### 〈注〉

1 胡風の伝記に関する資料には、主なものとして次のものがある。後頻出するので、アルファベットの記号をつけ、文中に示すことにする。胡風は自伝に類するものを三つ書いてゐる。

(A) 「自伝」一九三二年《プロレタリア文学講座Ⅲ》(一九三三年三月発行・白楊社)

これは、最も早く書かれたものである。胡風は、谷非という筆名で、同書に「中国プロレタリア文学運動の発展」という

論文を書いており、(発表は日本語)他の論文の執筆者とともに自己紹介として書かれた短いものである。

(B) 「理想主義者時代底回憶」一九三四年五月《我与文学》(一九三四年七月出版)

雑誌《文学》の一周年記念として、作家の文学体験談を集めたもので、五九名のうち一人である。この企画は、鄭振鐸、傅東華の手になるが、その編者のまえがきによれば、二百通の依頼状を出したとあり、かなり対象を幅広くとっており、創作活動に関するかぎり殆んど無名に近い胡風にも、執筆の機会が訪れたといえる。しかし、この後も胡風と《文学》の関係は極めて密接で、「林語堂論」の執筆を代表として、多くの評論が載る。或は何らかの人的関係があったかも知れない。因みに、現在目にする限り、胡風という筆名は、この時から使われ始めている。

(C) 「自伝(為一個外国刊物写的自伝)」一九四一年一月二四日《野草》一九四一年六月に発表。後、一九四三年に第三批評論文集「民族戦争与文芸性格」(重慶・希望社・七月新叢之三)に所収。胡風の附記によると、この自伝は、「某文化機関が、ある外国の文芸雑誌にかわって、中国抗戦文芸専号の原稿を求め、これはすなわち依頼の附帯要求のために書いたものである。」が結局は発表されなかったとある。

但し、胡風には、別に第三批評論文集「剣・文芸・人民」(一九五〇年上海泥土社・五三年四月第四版)があつて、内容は殆んど重なるがこれには、当時の《野草》の編輯者であり、胡風の友人であつた、聶紺弩の説明がつけられている。それによれば、一九四一年の四月末ごろ、聶紺弩が重慶に来ると、ほとんどいれ違いに離れていった胡風から預った荷物の中にこの原稿を発見した。その後の胡風の消息もわからず、自分がどうなるかもわからない。もし自分に万一ある時は、胡風と自分の経歴が似ているので自分の伝記とまちがわれるおそれがあるので今のうちに《野草》に発表するといった主旨である。

尚、更に、希望社発行の第三論文集「剣的路向」という本のあることが一九四七年発行の「胡風文集」の広告に記されているが、反対に前掲二冊は記されていない。同一のものかどうかは、今のところ確認していない。



その他の資料としては、胡風批判の時に発表されたものがある。

(D) 「關於胡風反革命集團的材料」一九五五年六月《人民日報》編輯部

これには

(a) 五月十三日人民日報編者按語

(b) 關於胡風反革命集團的一些材料(舒蕪)

(c) 附錄我的自我批判(胡風)

(d) 關於胡風反革命集團的第二批材料

(e) 關於胡風反革命集團的第三批材料

(f) 必須从胡風事件吸取教訓(一九五五年六月十日、人民日報社論)

が所収されている、それぞれ人民日報に掲載されたものであるが整理の便宜上、これを(D)としたい。尚(b)と(d)は最初は

「反党」であった。

(D) 「關於胡風反革命活動的一些事實」一九五五年《文芸報》十二号 文芸報編輯部

これは、《人民日報》やその他の刊行物に載ったものの中から、事実關係に関するものを中心に編輯したもの。そのうち特に「湖北日報」記者の「从胡風对地主家庭的態度看他一貫的反革命的立場」は重要である。

2 慶応義塾大学・学籍簿による。(17)を参照。

3 (1)の(D)による。(2)の学籍簿によれば張翊泰とあるが違いについては不明。

4 陳紀濤「胡風を懐う」一九七三年八月二十九日、「問題と研究」一九七三年十二月号

5 これらのペンネームで発表されている文章が、胡風の文集に収められている。

6 長兄・張名山との年齢の違いについては、一九四七年、彼が殺された年に出版された「逆流的日子」に胡風が書いた献辞に「大哥今年六十歳」とあり、張名山の生年が、一八八七年頃と考えられる。又次光張名梯については、(四)の湖北日報の調査の中に「一九五二年、この人民に監視拘束されていた地主で二番目の兄の六十歳の誕生日に」胡風が新しい衣服を送ったという記事があり、一八九二年頃の生れと考えられる。

7 長兄が殺された件に関しては、胡風は「逆流的日子」(評論集)の「後記」で触れている。「私の長兄張名山は、故郷で、ごろつきどもに大勢でおしかけられて殺されてしまった。ごろつきどもは、彼らの一族の者百人余りを動員した。それぞれに兇器を持ち、二十里内外の彼らの村からやってくる」と長兄の家をとりかこみ、路に歩哨をたて、裏門から崩れこむと二刀のもとに生命をとった。殺した後まだ血の流れる死体をひきずっていった。」

この事件に対して前記「湖北日報」記事は要約すると次の如くである。

湖北省のこの一帯は張一族と方一族の勢力が強く、江湖の漁業の利権をめぐる争いで、当時張一族の「族長」にのしあがっていた張名山が殺された。これは、地主階級内部の利権争いの宗派的な武闘の中で起ったのだが、注目すべきことは、方姓の地主が農民に「張名山を殺して仇をとれ」「張名山にやられた者にかわって仇をとれ」というスローガンをもってそのかした点で、農民や窳民は張名山をうらんでいたためにこの争いにまきこまれたのであり、農民の地主階級に対する矛盾とうらみが反映されているのであって、胡風が、そこに参加した農民をも含めて「ごろつきども」「暴徒」というのは、彼が地主階級の立場に立っているからだという。

8 詩集「野花与箭」(一九三七)に収められている「児時的湖山」は一九二五年一月の作であるが、その中で「没有了慈母温和的擣衣声／已経八年了」とあることから一九一七年と判断した。胡風は二三歳である。

母の死については、他に(四)の中で一九二一年頃のことをのべた文章に次の部分がある。「但因為五・四運動退潮期的低徊憂鬱的情調這時候在文芸裏面強烈地出現了，也因為母親底死亡留給我的深沉的悲愛，我陷進了近於悲觀的憂鬱心情。」

9 「春水」は一九二三年に出版された冰心の詩集である。「春水」にならって作詩をはじめたとすると時期的にあわない。結果として「春水」と同じような詩を書いたととっておく。この詩集は一九二二年出版の「繁星」と同様、数行の小詩からなる。王播、「中国新文学史稿」によれば周作人が、日本の短歌や俳句を訳し、鄭振鐸がタゴールの「飛鳥集」を訳したことなどもあって、ほんのわずかな思いを表現する小詩が大変流行した中で、比較的影響力のあるものであったという。

10 「五四時期期刊紹介」「覚悟」の「目録」による。

11 胡華主編「中国革命史講義」（中国人民大学出版社・一九六二年）に拠る。

12 胡風は、その時、いったいどのような立場で、この小説を書いたのであるうか。「献げる」と言ってもいろいろな立場があったであろう。この場合小説を読めれば問題は無いのであるが、現在の時点では、情況拠証によって推測するしかない。

第一は、彼が投稿した、上海、「民国日報」の副刊「覚悟」一九二三年頃の傾向である。「五四時期期刊紹介」によれば、「上海民国日報」は孫中山の中華革命党により、袁世凱に反対して宣伝するために創刊されて以来「ブルジョア民主主義の立場に立ち、封建主義に反対し、軍閥統治の暗黒を暴露し、進歩的文化運動・学生運動・労働運動を支持し報道し、ロシア革命とソヴィエトロシアの建設を紹介する等の面で、上海のブルジョア新聞の中で比較的進歩的であった。」そしてその副刊である「覚悟」は、五四以後出現した四つの有名な副刊のうちで、基本においてマルクス主義を宣伝した唯一のものであった。二〇年代「覚悟」はマルクス主義宣伝の園地になり、「覚悟」は事実上上海共産主義グループ（中国共産党）の影響下にあったという。

これを正しいとするならばこの「覚悟」に投稿し、採用されたということから胡風の小説の傾向はある程度推測できるのであるか。

第二に、だが、胡風は、二七事件に対する論文を発表したのではなく、「小説」を発表したのである以上、当時の「覚悟」の文芸面での位置も見なければならぬ。同じく「紹介」によれば当時の「覚悟」に載った、「文芸作品と文学評論はかなりの比重を占めており、特に白話小説と新詩がほとんど毎号あったが思想性と芸術水準は高いとは言えない。」「内容にっ

いて言えは、これらの作品の大部分は、現実主義（リアリズム）のものであり、社会を改造する強烈な願望、革命的決意と労働人民に対する同情を表現した。一部には個人の哀愁をのべる方に傾きつつやはり、時代の動揺と不安を反映したものがあつたが、現実から遊離し、わけもなく呻吟し、旧社会を美化する作品は極めて少数であつた」とあり、全体として一応の傾向をもちつつ例外的作品も、存在したことがわかる。

更に、労働運動のとりあげ上については時期によって異なり、一九二二年は、労働運動の発展の影響を受けて前進するが「一九二三年の二七惨案は「覚悟」に熱烈な反映が少しも見られない。」として二、三の論文を掲げているが、胡風の小説は全く無視されている。この理由は、様々考えられるが、当時の胡風の傾向からみて題材として「二七事件」を取りあげてはいるものの政治的にはさほど秀れたものではなかつたということであろう。

これらのことから、胡風が、「覚悟」に投稿したことにより即マルクス主義へ接近したとするのは早計であり、まして文学面において、マルクス主義の立場に立つていたとする資料とすることはできない。

但し、彼が中国近代史の中で「二・七」を、かなり大きく位置づけており、後に「中国プロレタリア文学運動の発展」を書いた時に、度度この事件に触れ、「成長してきた新興階級の力をみせた」とし、又、「いくらか階級の意識を持っている詩が現われた」ものの一つとして、鄭振鐸の「死者」をあげ、「二・七流血事件を咏んだもの」であり、「高まって来るプロレタリアートの需要を反映したので、プロレタリア文学の予告とも言える」としているのは、この時の体験が強く彼の印象に残つたものとして注目できる。

13 「五四時期紹介」及び、蕭三主篇、「革命烈士詩抄」（一九六二年中国青年出版社）の香港影印本、の惲代英の伝記を参照した。武漢における五四運動についての検討をしている予裕がなかつたので、安易の譏りは免かれなと思う。「互助」や「利群」の名称からアナキズムの影響のあつたことがうかがえるが、これらの資料は、そのことに触れていずマルキシズムの運動であつたことが強調されすぎている気がする。

ただ胡風はこれらの運動には直接コミットしていなかったとする私の論旨には、とりあえず、影響はないと思う。

14 陳紀澄「胡風を懐う」一九七三年八月、前出。一九二三年南京に存在していると思われるのは、東南大学（民国九年十一月創立）私立金陵大学（宣統三年創立）金陵女子大学（民国四年九月創立）である。

15 慶応義塾大学学籍簿による。（17）参照

16 「關於胡風反革命集團的第三批材料」では、胡風と国民党との關係を示すことを目的としているが、その「編者按」では、「一九二五年他在北京，當時段祺瑞統治下的白色恐怖把他嚇昏了頭腦，堅決要求党允許他退出團。後在江西，勦共，軍中做過反共的政治工作，又去日本混了一個時候，幹了一些不可告人的勾當。回國以後，他在上海混進了左翼文化團體，從內部進行了種々分裂破壞活動。在武漢和重慶時期，他和國民黨的許多特務頭子有聯繫。」と書かれ、これが後の胡風批判の正式な罪状として引用されるようになる。又一九五七年十一月周揚と会った本多氏は胡風のことを聞きたい、出来れば会いたいと申し出、それに対する周揚の回答として「胡風氏は一九二五年に共產主義者の団体に入り、その後脱退して国民党に入り、反共的な文章を書いた。それから日本へ行って進歩的文学者になった。その後帰国して、どうして革命文学者になったか不明である。彼は表面では国民党に反対しながら、裏面では国民党と關係があった。」（「有効性の上にあるもの」P、114）という言葉を記録している。国民党に入党していたという新事実（？）と、かつての胡風の友人にさすがに「在日中人にいけない悪いことをした」と言わなかった点を除けば、前出の公式見解どおりである。

又、同じく、日本で胡風と面識のあった江口渙氏は一九六一年七月に周揚を訪問した時のことを次のように記している。

その席上で周揚は私に次のようなことを話した。「江口さんは胡風をよく知っているからお話しますが、胡風は古くから国民党に席をおきながらいつわって共產党にはいつていたのです。とくに国民党の特務機関とはずつと前からふかいつながりを持っていたのです」

「それじゃ」と私が聞いた。「彼が日本に来ていた時もすでに国民党にはいつていたのですか」

「むろんそうです。彼はずつと古くからの国民党の黨員です。じつにひどい男です。」(「たたかひの作家同盟記」下・P、

87)

ここでも胡風の国民党入党が語られて居り、周揚氏はどうやらそれを事実と認定しているらしいが、「入党」そのものは公式的には明らかにされていない。因みに、周揚氏が監督したという(?)「魯迅全集」の注釈(一九五八年人民文学出版社)でさえ「一九二七年国民党の蔣介石が反革命クーデターを挙行した後、積極的に国民党反動派の『剿共』工作に参加したことがある」というに止めている。

17 慶応義塾大学文学部の佐藤一郎教授の紹介を得て、同塾史資料室の丸山信氏、同教務部長の関口研日鷹氏に張光人の調査を依頼したのは、一九七七年十月三日、同五日付で回答、及び、学籍籍の写し及び昭和六年四月一七日付教授会記録の写しを頂くことができた。成績原簿も保管されているとのことだったがプライバシーの配慮から今回は公開されなかったが、同書中の専攻名、退学の日付などは教えていただいた。

18 東亜高等予備学校については、実藤恵秀著「中国留日学生史の研究」を参照した。

19 「留日中華学生名簿」(財団法人日華学会学報部編)昭和六年版・同七年版・同八年版参照。同名簿は昭和二年以来、毎月五月現在にて編集刊行されている。官立、私立を含め大学・予科及び専門学校毎に、その年度の全在学者の氏名、年齢、出身地、学年、出身校、学費の負担の種類等を列記している。同名簿は実藤文庫には、昭和六年より後が保存されているが、昭和二年〜五年はない。その為、昭和五年に東亜高等予備学校在籍していたかどうか、確認できない。尚本資料の存在は、芦田肇、小谷一郎両氏より教示せられ、張光人の慶応在学年度が明らかになったことがきっかけで慶応への調査依頼をすることができた。

20 「文壇消息」欄には、次のように並んでいる。

一九三〇年諾貝爾文學獎金得者——辛克來劉易士／哥爾德寫卓別靈／花爾藤的寫実新作／最近高爾基的言論／威爾士的非戰論／英國文壇零訊／坂本設計的新的舞台／太戈爾的近狀

このうち張光人が担当したものの三本の他はすべて楊昌溪である。尚、チャップリンに関する記事の後に附註として「本書已有周起応訳文、將由比新書局出版」とあり、周揚の仕事にこの二人のうちのどちらか、或は編集者が通じていた可能性がある。尚楊昌溪という人については、他に果爾徳の「無錢的猶太人」という翻訳があるとのことである。(王哲甫「中国新文學運動史」)

21 参考までに前記、「留日中華學生名簿」より合成した、学費別の表を次に掲げる。

	学生数	官費	公費	文化			小計	自費	不明
				補給	選	特選			
昭和六年合計	三〇九六	三四一	五二	二一七	二七	五	六四二	九九四	一四六〇
昭和七年合計	一四二一	二五五	三三	一三三	一九〇	一九	六三〇	四〇二	三九七
昭和八年合計	一四一七	二二六	二二	八五	二三六	一六	五八五	四五五	四〇一
文部省直轄	六〇八	一九〇	二〇	五一	一四三	一四	四一八	二〇〇	六
私立	三六八	三	〇	三三	四六	二	八四	二七	二五八

この表から次のことがわかる。即ち、「九一八」事変後の帰国運動で留學生数は著しく減少し、その為、相対的に私費生に対して給費生の割合は著しく増加した。又、私立大学では、公立に比べ、給費生の割り合は低い。尚、文化事業部の給費生に關しては本国からの推薦で決まり、「選抜」とは、大学側からの推薦で決まるものであるという。

22 「外事警察報」一三四号(昭和八年九月)所載の「帝都に於ける支那留學生等の反日左傾運動」によれば、内務省訓第一五

○五号を以つて退去命令を發せられた二二名(胡風もこの中にいる)は、一三日に一七名、一五日に五名、即ち全員が日本を退去したことになる。

23 一九七七年一〇月、西脇順三郎氏から話を伺う機会を得たが、張光人については何も記憶して居られなかった。当時、学生數も少く、文学部には中国人留学生は二人しかいなかったから、張光人の動向如何では、印象深く記憶に残る可能性もあると思うが、どうやらそうではないらしい。昭和六年当時、西脇氏三七歳、少壯の教授であるが、一九二八年『詩と詩論』が創刊されて以来その中心として、詩壇でめざましい活躍をしていた。

24 前記「留日中華学生名簿」によれば、昭和六年の慶応大学の中国人留学生は四八名。(内大学二八名、専門部二〇名。医学部を除いた学部生二一名の内、湖北省出身者は六名である。)

25 一九七七年一〇月一七日、本多秋五氏から直接お話を伺う機会を得た。以下要約すると「泉充氏是一九〇八年(明治四一年)五月二九日生れ伊勢桑名富洲原町(現在四日市市)の出身で、慶応英文科で、一九三二年ごろには本論にオーフラティ(補注)(オフレアティ?)をやるといっていた。三二年四月に卒業していないとすれば家庭の事情によるものだった。母は病氣であったが、父母の仲が悪く、兄(善平)もいたが腹違いで、彼が母の看病をしなければならなかったためだ。当時彼の家族は四谷の坂町別館に住んでいた。日比君というのは泉充のことかも知れない。泉氏とはプロ科ではじめて知り合った。当時は高島と名のっていたが、プロ科の中では姓があるだけで、名前は別になかった。胡風は当時、張文人と名のっていた。張さんには泉充から紹介をされた。本多氏は高瀬と名のっていたが、名は「太郎」で文章を書いたことがあるだけで、いつもは使わなかった。胡風は髪が赤く、顔にアバタのあるおとなしい青年で、日本語はあまりうまくなかった。それでゆっくりとした話し方をする本多氏と親しさも増したようだ。

泉氏は、その後「上海へ行ったら張さんのやっかいになるう」と希望のようなことを述べたことがあった。

泉氏は一九四七年中支から帰ってきたが一月二〇日、病没した。(文責は近藤・お話の順序は必ずしもこうでないが、泉



氏に関する部分をここに並べた。本多氏が著書で既に書かれていることはできるだけ重複をさけた。本多氏には他についてもいろいろ御教示いただいた。

26 本多秋五「胡風のこと」(「有効性の上にあるもの」未來社・一九六三年・所収、原載は「近代文学」一九五四年一月号。

27 「外事警察法」一三四号(昭和八年九月)により住所が判明した。

大久保弘一著「赤色支那」(東京・高山書院・昭和十三年刊)の「日本に於ける中国共産党の活動」では、「四谷区仲町三ノ二・高島方」となっている。

この住所は、現在町名変更の結果、新宿区若葉一―一九―五にあたる。一九四五年五月二五日の空襲で焼けてしまっているが、近所に戦前から住んでいる人がいて、その人の話から高島宅のあったことが確認できた。その家は、三軒並びの貸家で、一番奥の一軒が高島という若夫婦が住んでいたという。又当時の家主であった島田氏に会うことが出来た。(現在高円寺住)島田氏は自身一番手前の家に住んでいたこともあり、わずかながら高島氏とのつきあいもあった。高島氏は、慶応の卒業生と自称し、一緒に銀座の交詢社で飲んだこともある。自由業のような人で、モダンで、口のうまい人だった。弟も慶応というところで二、三度会ったことがあるが、おとなしい人だった。中国人が下宿していたのは知らない。二階建てで、二階も二間あったから下宿は可能だ。高島氏の終戦後のことについては知らないとのことだった。慶応大学の塾員名簿には高島正貫氏はみあたらない。特選塾員が高島一貫という人がいるが<sup>補注2)</sup>不詳。

28 この件に関しては一九七七年一〇月二三日付で本多秋五氏より葉書きを頂き、確認することができた。文面次のとおり。

「平野謙夫人田鶴子さん(泉充妹)に高島という下宿について聞いたところ、同じ下宿に泉君も張さんもいて、二人はびったりくっついたような生活をしていて、泉君の部屋を通らねば張さんの部屋へ行けぬ構造だった。素人下宿で、他に止宿人はなかったとのこと、四谷見付より新宿へ行く道の右側に坂町、丁度それと同じような左側の位置に仲町があったとのこと

とでした。今、地図を見ると仲町はなくて、その辺に若葉町というのがあります」

29 プロレタリア科学研究所は一九二九年十月、国際文化研究所を發展させて創立されたが、一九三一年十一月頃から日本プロレタリア科学者同盟への發展転化の必要が提唱され、準備期間を経て、一九三三年一月三日「日本プロレタリア科学」同盟に改組される。当初は、四部門に分れ、第三部（文学、芸術）には、林房雄、平林初之輔、岩崎昶、香野雄吉、片岡鉄兵、藏原惟人、川口浩、金田常三郎、黒田辰男、勝本清一郎、村山知義、新島繁、永田一脩、小野宮吉、岡本唐貴、佐野碩、杉本良吉、茂森唯士、高田保、外村史郎、辻恒彦、山田清三郎、柳瀬正夢などが研究員として名をつらねている。（このリストは機関誌「プロレタリア科学」創刊号に發表されたというが、宮内勇「一九三〇年代日本共産党私史」（三一書房）より転載した。）これを文学関係からみれば、日本プロレタリア作家同盟のメンバーと重複する者が多い。一九三〇年八月の「プロレタリア文芸辞典」（白揚社）によればその主たるメンバーとして、秋田雨雀、江口渙、江馬修、林房雄、中野重治、藏原惟人、川口浩、鹿地亘、片岡鉄兵、小林多喜二、山田清三郎、立野信之、藤枝丈夫、壺井繁治、上野壯夫、槇本楠郎、仁木二郎、猪野省三、徳永直、白須孝輔、橋本英吉、武田麟太郎、三好十郎、勝本清一郎、貴司山治、大宅壮一等があげられている。この関係について松本正雄氏は

『プロ科』の芸術部会も、いくつかの研究会を發足させて、ソビエトや中国、ドイツやフランス、イギリスやアメリカなどのプロレタリア文学、芸術の理論的研究に着手した。『国際文化』からの人びとの大きな部分は芸術部会に属した。ただ、私の記憶ではそれらの人びとは、作家同盟などの芸術関係団体の同盟員が多く、それらの諸団体の活動の方に時間を取られ、『プロ科』の方には新しい人の活動が目立つようになったのだったと思う。」

とのべている。(「過去と記憶——ファッションと闘った人びと」(一九七四年光和堂))

研究所は、上落合五〇二番地から中野町打越二一五四を経て、間もなく、神田区今川小路一一一江戸ビル内に移ったが、前記松本氏は「おぼろげ」としながらも次のように回想している。

「その建物は通りに面している間口がひろく、奥行はせまかった。入口は水道橋の方から行って先のはずれにあり、入ったすぐのところが事務室で、その奥の通りに面した方に小さい部屋が一行にいくつか並んでいた。と私の記憶にある。その小部屋で私たちは研究会をひらいていた。

芸術部会にはいくつかの研究会があった。これまたおぼろげな記憶だが、世界芸術研究会ともいうべきものがあって、ここでは当時の世界の芸術文化現象を研究した。芸術理論研究会では、そのころわが国に紹介されていた外国の芸術理論が研究されたが、それらはいうまでもなく、日本の文化、芸術運動の発展に役立つものという含みを持っていたことはいうまでもなく。」

松本氏は、先のリストでは「第二部」(哲学・歴史に)属しているが、プロ科は、一九三〇年五月には部門制を廃して研究会制に改められている。研究会の名称だが、一九三三年の「プロレタリア科学」一月号によれば、八つあってそのうち「芸術学研究会」というのがあってそれにあたると思われる。胡風が入会したのであろう一九三一年頃については不詳。岩村三千夫氏の「上申書」によれば、一九三三年三月以降研究会活動が全体的に停止したが、「検挙ノ被害ヲ比較的ウケナカツタ哲学研究会、芸術学研究会カ存続シテキタ」ということだ。(「日本プロレタリア科学同盟ノ組織状況並ニ活動状況」一九三五年二月一日、『日中』一九七七年一月所載)

30 「たたかひの作家同盟記」(一九六八年、新日本出版社)あとがきによれば、『文化評論』一九六五年一月号から一九六七年

五月号に連載。著者七十七歳の冬から七十九歳の春にかけて執筆。「二十六回も書きつづけているうちに、いろいろと記憶のまちがいのもあった」とされており、この版では多少の訂正がされているようだが、尚吟味が必要であろう。

「その頃」というのは一九三二年七月八日の作家同盟第四回大会の後のようである。江口渙は、一九三〇年四月六日の第二回大会で委員長となり、以下重任するが、第四回では書記長に小林多喜二が就任した。江口氏のいうのはこの頃らしい。この大会で選出された執行委員は他に橋本英吉、中野重治、川口浩、大宅壮一、貴司山治、立野信之、本庄陸男、中条百合子、山田清三郎、鹿地亘、徳永直、越中谷利一、秀島武、森山啓、阿部真二、田木繁である。この頃「中国文学研究部」というものがあつたかは不詳。「台湾・朝鮮問題研究部」というのはあつて江口氏を責任者としている。

31 藤枝丈夫氏は、胡風について知らないという。「野草」17（一九七五年中国文芸研究会）「日中文学交流の一断面——藤枝氏談話要録および資料」参照。一九七四年七月二十七日、八月九日、一九七五年一月二六日に、藤枝氏に胡風について尋ねたが、いずれも同じ内容であつた。尚、「左連」との連絡をとつた人物として、藤枝氏は葉華という人物をあげられ、その人から贈られたという「辞源」及び原稿「在前進的途中」を呈示された。葉華という人物については、同「野草」に釜屋修氏のレポートがある。藤枝氏の話からすれば、葉華とは、盧森堡を通じて知りあい、一九二九年ごろから交際があつたと言う。私は、葉華即胡風説はとらないし、葉華という人物がいたことを否定するものではないが、胡風と藤枝氏はやはり面識があつたのではないかと思う。記憶に残る程のものではなかったかも知れないが、その根拠になるのは、島田政男著「嵐に立つ中国文化」（一九四八年国際出版）で、一九四六・七年に上海で胡風を訪問した。「何かのついでに藤枝丈夫の名が出たが『あの男は駄目になつたろう』と胡風氏は無難作に言つた。私はその次の新聞電報に、彼の本名水谷考の名が日本共産党中央委員に列つていたことを話すと意外だという顔をした。」とあるからだ。本資料について、沢谷昭次氏より御教示を頂いた。

尚、葉華に対しては、次のような可能性を提起しておきたい。

当時、(一九三一年ごろ)日本に留学しており、且、「左連」と関係していたものに華蒂がいる。恐らくは誰かの筆名であろうが、「北斗」二巻一期の「一九三一年日本文壇」を読むと、当時の日本の文化情況、とりわけ左翼文壇に相当深く通じていることがわかる。華蒂はこの他にも「北斗」二巻三・四期に「日本作家同盟第五次大会」というニュース性の強い記事を書いているほか、「文学月報」一巻三期に、九一八一周年を記念する「一個印象」、(九一八当時東京にいたことを示している。)を書くなど他にもいろいろ文章を載せている。

華蒂について、江口渙は「日本プロレタリア文学の支那訳とその訳者」(「文学評論」一巻八期一九三四年一〇月)の中で「窪川伊奈子集」(現代書局近刊)と川口浩の「プロレタリア文学概論」の中国訳「創作方法論」(天馬書店)の訳者として紹介し、略歴を書いているが「浙江省の人で、歳は二十六歳」「中国左翼作家連盟に加盟しており」一九三一年から日本に留学していたが、満州事変が起ると、早稲田大学文科を半途退学の形で突如帰国し、上海で盛んに実地工作をやった。詩がうまいので有名」とある。

又、王礼錫の「戦時日記」中に引用されている「日本軍上海進攻による民衆屠殺に対する中国著作者の宣言」に署名したもののリストの中に葉華蒂という名が見え、華蒂の姓が葉であった可能性が強い。

藤枝氏のいう葉華とこの(葉)華蒂とはいくつかの重要な共通点を持っており、一九三二年九一八まで「左連」との連絡を担当し、それ以後、胡風に引きつがれたという可能性が強いのではないかと考えられる。

32 国防文学論争の中で、郭沫若は「蒐苗的検閲」(「文学界」四号、一九三六、八、三〇付)を書くが、その中で「胡風を、私は前から知っている。彼は聡明で、又少し気の強いところがあるように思った。」と述べている。郭沫若が上海に戻るの是一九三七年のことであり、日本時代から胡風を知っていた可能性が強い。(但し、胡風が、北関から武漢時代に目立った活躍をしていたとすれば、その頃からという可能性が全くないではない。)

33 この論文については、既に飯田吉郎氏による紹介「左聯の機関紙について」(鳥居博士紀念論文集)がある。そこでは「胡

風が谷非の名前で日本プロレタリア作家同盟に送った」「当時、プロレタリア文学運動の渦巻ける上海より送られたルポ」と評されている。『プロレタリア文学講座』は稀少本であるが和光大学の祖父江昭二教授より拝借することが出来た。記して謝意を表します。

34 『無軌列車』と馮雪峯については、前田利昭氏の『第三種人』論争における馮雪峯（『東洋文化』五六号、一九七六年三月、東洋文化研究所）で既に論じられているので参照されたい。

35 「秋田雨雀日記Ⅱ」（一九六五年、未來社）「一九三二年の夏」をたよりに調べてみると、それらしい会合は、一九三二年八月一日にみえる。但しこの日記は必ずしも毎日つけたという訳でもないので断定できない。

「八月十四日 晴。午後一時から江口の宅で「大震災火災の思出」について座談会があった。江口、中条、佐々木、山田、十時、丸山その他の諸君が列席した。中条は益々肥ってきた。しかし大して身体が悪いことはなさそうだ。以下略、（午後一時から江口君の会。）」

36 「越過大海和火網的悼念——悼日本人民底思想戰士宮本百合子」（一九五一年一月二八日『人民日報』）『新日本文学』に訳載。  
37 本多秋五「胡風のこと」

私および私たちが、まだ中条百合子を「評価していなかった時代に、最初に中条百合子を「発見」したのは泉充だったが、その中条熱を彼が私たちに鼓吹するとき、「中条さんはとても女らしい人だよ話をする時にもなになにだわよ。というふうに話すのだ。」と、いって意外な思いをさせたことがあった。それを思い出したのである。ではやはり、胡風は張さんなのだ、と思った。ここで張さんが「ある日本の同志」といっているのは、泉光のことであるかも知れない、多分そうだろう、と思つた。」

39 胡風「憶東平」（一九四六年）（『為了明天』及『胡風文集』所收）

40 「關於現實與現象的問題及其它」（『文芸』一卷一期、一九三三年一〇月）による。二人の友人が誰をさすか。周揚、馮雪峯あたりが可能性が強いのではないかと思うが、全くの推測にすぎない。

41 『文学月報』一卷五六期（一九三二年二月）

42 『現代文化』は、一九三三年に二期二期のみ発行された。その第二期には、かの「対魯迅先生的『辱罵和恐嚇決不是戰闘』有言」が掲載されるなど問題をはらんだ雑誌である。「文革」の中で、これには、周揚、田漢、祝秀俠が関連しているといわれたが、丘東平については勿論のことこの雑誌には検討が必要であろう。胡風が原稿を預けた上海の友人がこの雑誌と関係があったということであろう。尚上海文芸出版社『中国現代文学期刊目録』（一九六一年）では、この雑誌を、『文芸新聞』『無名文芸』などと並べて「左聯有關刊物」の中に分類している。

43 内村護について藤枝丈夫氏は、安斎庫次ではないかという。『野草』17号

44 『綜合』創刊号（一九三四年五月）所載。この執筆は、一九三三年九月二〇日であるが「一九三四年三月十五日、作者於T市」の「附記」がついていて、この文章を書いた時には、もう「社会主義リアリズムは提出されていたが、資料も充分得られず大衆的討論も足りなかった。この半年間で我々は、原則的には初步的な理解を得たとして、主題の積極性についてもこの理解を基礎に討論すれば大いに違つたものにならうとのべ、不十分さを自覚しつつ参考文献としてのみ提出したようである。又、当面の理論活動の主要な危険性として機械主義と、セクト主義をあげているのは、当時の胡風の位置を語るものとして重要であるが、これを含めて上海に戻つてからの胡風については稿を改めて述べたい。

45 「プロレタリア文学」一九三三年四月号、尚「プロレタリア文学」「プロレタリア科学」については、大丸義一氏に閲覽させていただいた。この記事は同夫人・小山伊基子さんから教示された。

46 以下の問題については、既に竹内実氏が『久保栄研究』九号、「座談会」、『資料世界プロレタリア文学運動』三巻「解題」で

紹介されている。竹内実氏は、大久保弘一著「赤色支那」(高山書院、昭和一三年)と『文化之光』一号(一九三二年一〇月)を基本資料とされている。私も同資料を使いながら、若干の別資料も得たので、以下胡風に焦点をあてて追究してみたい。

尚、「赤色支那」の著者大久保氏は、陸軍省新聞班の陸軍歩兵中佐であり、その使用する資料、立場はいわゆる「官憲」側であることはいうまでもない。だが、以下具体的事実にあたってみると細部における真実はかなり信用でき、やはり貴重な資料といわざるを得ない。但し、運動の性格等をめぐる判断については、氏の意図は明白で、私としても慎重にならざるを得ない。両資料とも、竹内実氏に利用の便を与えていただいた。

47 方瀚については、早稲田大学に問い合わせたところ「政治経済学部経済学科、昭和六年四月一日入学、昭和八年六月二十日、校規により退学」ということが確認された。「赤色支那」「外事警察報」ともに湖北省蕪湖出身、年齢二十八歳としている。「留日中華学生名簿」によれば「武昌中華大学二年修」とある。

48 「赤色支那」は聶衣葛(二九歳)となっているが「外事警察報」では、聶紺(一字脱)三〇歳となっている。両者ともその住所は周頴と同じであり、周頴は聶紺の妻とある(「赤色支那」)から、聶衣葛は紺と理解するのが妥当であろう。

49 王承志は、「留日中華学生名簿」によれば昭和六年五月現在、東京本郷金助町の第一外国語学校の(在学者一〇九名)の「日語高等」に在籍。年齢二十三歳、本籍は湖北省漢陽県で、北平大学が出身校である。「特高月報」は「早大政経研究科一年」とし、「外事警察報」も「早大」としているが、早大に問い合わせたところ該当者なしという回答であった。尚、明治大学という記事もある(「赤色支那」)が「留日学生名簿」には、早・明両大学とも該当者はいない。「国民新聞」(一九三二、九、二二)は、「明大生金謀(二四)」をメンバーとしてあげているが、年齢が同じであることから明大説が出たのかも知れない。

50 周頴は「留日中華学生名簿」によれば河北中央政治大学出身、昭和六年現在、早稲田大学政治経済学部政治学科二年、(二五歳)同七年、三年、聴講生、同八年、同じく三年に在学している。六年七年と文化事業部の補助給費生である。

51 竹内実氏蔵 原本については、「資料世界」プロレタリア文学運動「解題」参照。



52 早大生汪、明大生金なるものは該当者なし、年齢、大学からみて方瀚と王承志の偽名の可能性もある。

53 「中国共産党日本特別支部」というのは、一九二九年ごろ正式に成立存在したとされるもので、「社研」を中心に留學生の運動を組織したとする。一九二九年九月四日の銀座街頭デモによる検挙を契機として、十月三日に第二次検挙があり（合計百十三名）その後も含めて百二十九名の検挙者のうち党員が五十五名いたとされた。中心は帝大生鄭購とされている。（「赤色支那」留學史稿）（東大文学部の学生名簿によれば福州市出身・大正十五年三月入学・昭和四年三月除籍）

54 この記事は、留學生七百余名の運動として、それは水害見舞のカンパ活動のことで、それを「新興文化研」の運動ととり違えているようである。

55 「社研」の日本分会については、アグネス・スメドレーの「中国の暗黒を通して」（証不二夫訳・『ナップ二』巻五号、一九三一年五月）で「一九三〇年の春と夏に、この全左翼が合同して共同戦線をつくり始めた。最初に『全中国社会科学者同盟』が出来、上海に本部を、国内の各省と日本の支部をもった。」と触れられており「その東京支部は四十人の成員をもって出発し、数ヶ月間優秀な月刊雑誌『闘争』を出版した。」と紹介されている。だが、「赤色支那」によれば「社研」は一九三二年來日した法政大学生漆憲章により、九一八事件が起ると帰国した「社研日本分会」幹部の後をうけて、上海の「中国社会科学聯盟」の指導下に再組織を企図したとある。更に彼は「科学半月刊」「科学新聞」を發行し、「自然学会」を作り、東京医専生汪成模、法政大学生郭兆昌、工大生習明倫、明大生黃鍾銘らを「予備中国共産党」を組織し、「社研」の活動母体としたとする。又「外事警察報」は「同年（一九三二）四月以來法政大学生漆憲章等の一派は、前年の一斉検挙に解消せる『中国社会科学研究会日本分会』（略称『社研分会』）を再建し、ソヴェート聯邦擁護、打倒日本帝國主義等を標榜せる機関誌『科学月刊』『科学新聞』等を發行し……」とあり、一斉検挙によるか帰国によるかは別として、スメドレーの紹介する「闘争」を機関誌とする「社研」解消の後の再組織された団体であるう。勿論、一九二七年頃から組織され、『海外青年』『五化』を發行し、「日本特支」事件（53参照）で検挙された「社研」とは全く別である。

56 「プロレタリア文化」三卷二期（一九三三年二月）声明は一月付。尚本資料は芦田肇氏より教示された。

57 「留日中華学生名簿」によれば「河北中央政治大学」とある。

58 「魯迅日記」一九三四年二月一九日及一九三五年五月八日、又、一九三四年五月一八日には葉紫、紺弩、許広平、海嬰とコーヒー店に行っている。

59 この事件に関係する日本人は、浅川兼次の他にはいない。（「赤色支那」「外事警察報」とするとこれは浅川の変名なのであろうか。「特高月報」の治安維持法違反検査者の中にはみあたらない。岩村氏によれば浅川の筆名は村川源治としている。「日本プロレタリア科学同盟ノ組織状況並ニ活動状況」

60 山室静『「辺城」小感』（「山室静著作集」第五卷・冬樹社）はほんの少しこのことに触れている。一九七七年一〇月一八日付本多秋五氏の近藤宛私信「先刻やっと山室君と話ができました。青山というペンネームは使ったことがあり留置所は多分中野署だったでしょう。十日位一緒にいた、秋田雨雀の本のことは知らないとの返事でした。」胡風は「秋田雨雀印象記」の中でこのことにふれている。

61 本多秋五「周揚氏と胡風問題」（「有効性の上にあるもの」所収、原載は「日本読書新聞」一九五八年一月一日付）

補注1 この記述は本多氏に質問する時、私が別の資料から卒業していないととり違えたためで本多氏は、「英語の教師をしていたから卒業してははずだ」とされながら、尚こうした事情を思いうかべられたのである。事実は、氏が「日本近代文学大事典」に執筆されたとおり、昭和八年に文学部を卒業している。この項執筆後本多氏から指摘され、調査しなおして私の誤りがはっきりしたので補注とした。

補注2 その後、高島一貫（かつら）氏の遺族を千葉県我孫子市に尋ねたところ、高島正貫氏の実兄であることがわかった。高島貫一氏（一貫氏の弟で正貫氏の兄）未亡人タカさんの話によると、下宿をやっていたのは、正貫氏でなく、その姉ふみねさ

んで、確かに張さんという中国人の下宿人がいた。満州事変でスパイとまちがえられて警察にあげられたがとてもいい人だった。ふみねさんは洗濯物をとどけてやったり親味に世話をしていたという。尚正貫氏は慶応とは関係なく、昭和五年には結婚して我孫子にいたはずであるといい、前記島田氏の証言と喰い違う。ふみねさんも正貫氏も既に故人であり、事実が確かめられないのは残念である。